

The History of Neuropathology in Niigata

Since 1948

1995年

生田房弘教授退官記念事業会

はじめに

この度、私どもの敬愛する生田房弘先生のご退官を機に本書が出版され、皆様のお手元にお届けできる運びとなりましたことは大きなよろこびであります。

生田先生は、新潟大学脳研究所 実験神経病理学部門の初代教授として1973（昭和48）年よりご退官の1995（平成7）年までの22年余の間、神経病理学の教育、研究に全身全霊をもってあたられ、数多くの門下生を育て上げ、また、それら門下生とともに数多くの業績をご発表になられました。

先生の学問的興味は実に幅広い領域に亘っておりましたが、そこには、常に「病理学とは真に“病”の“理”をつまびらかにする学問」という徹底した学究哲学がございました。現在、全国各地でご活躍中の先生の門下生おひとりおひとりが、この教えのもと、さらなる研鑽を積みつつ進んでおられることと思います。

また、先生は医学部の学生教育にも多大な情熱を持ってあたられ、教授就任以前からご退官の年まで、将来医師となるべき医学生に神経病理学の講義を続けてこられました。その眼差しには、まさに先生の後輩に対する熱き思いを感じずにはいられませんでした。この思いは、脳研究所に対しても同様であり、1985（昭和60）年より1993（平成5）年までの長きにわたり、所長としてその発展にご尽力なされました。そのひとつは、1995（平成7）年4月、脳研究所大部門制へ改組という形で具現化しました。因みに、先生のご開講による実験神経病理学部門は病態神経科学部門 病理学分野と改称、引き継がれることとなりました。

先生はご退官後の1995年4月、「神経病理学の研究」に対するご功績により紫綬褒章をお受けになりました。その折、先生は、「私は国からこのようなお褒めをいただける人間ではないが、神経病理学の発展に尽くした、と認めていただけたことは実に嬉しい」とおっしゃっておられました。私どもにとって生田房弘教授に学ぶ機会に恵まれたことは何とも言い様のない幸運であり、心から感謝申し上げる次第です。

ご退官後、先生は新潟県西蒲原郡黒埼町にあります新潟脳外科病院ブレーンリサーチセンター所長に着任、現在も、教授時代に勝るとも劣らない迫力で中国、東欧、ロシアなどとの国際共同研究に取り組んでおられます。これからもいつまでもお元気で、私どもをご指導下さることを心から念願するものであります。

生田房弘先生のご健康と益々のご発展を心から祈りつつ、

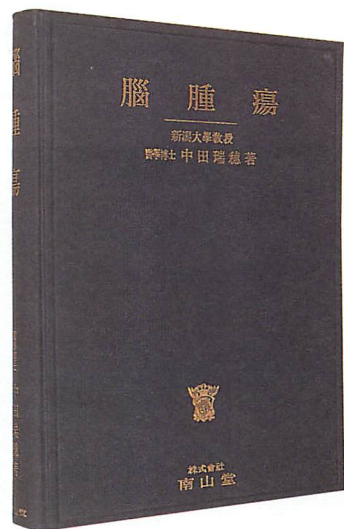
1997（平成9）年 初春

高橋 均



中田瑞穂先生（55歳）

1948(昭23)年5月29日(土)の新潟医科大学の運動会。この月の初めに第48回日本外科学会総会並びに第1回脳外科研究会（後の日本脳外科学会）を立派に主催されている。またこの前年及びこの翌年に、日本で初めての専門書「脳手術」並びに「脳腫瘍」が全国に発売されている。



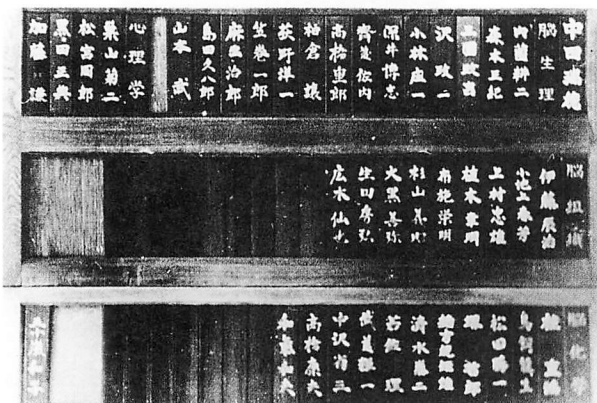
中田瑞穂先生の「脳腫瘍」、南山堂、1949(昭24)年刊



脳の共同研究の幕開け、
自称「新潟大学脳研究室」の誕生。

1956(昭31)年5月

伊藤辰治医学部長は中田瑞穂先生の退官を機に、学部に措置で旧奉安殿（戦中天皇陛下の写真が安置してあった鉄筋建物）に木造の二階をあげ、2階に形態学、化学、1階に生理学と三つの研究室を作られた。2階の形態学研究室に杉山義昭と生田房弘の両先生には「赤門」が見下ろせる（写真左側のかくれている壁面）窓向きの机が与えられた。小さいながら念願の共同研究の幕開けであった。左の旧医学部木造本館講堂脇に一本の細い「から松」が見える。



「新潟大学脳研究室」誕生の記念講演会するとき。

1956(昭31)年5月

前列左から久留勝教授（大阪大学外科）、中田瑞穂先生（63歳）、平澤興教授（56歳、京都大学解剖）、荒木千里教授（京都大学脳外科）、佐野圭司先生（東大脳外科清水健太郎教授代理、現東大名誉教授）、伊藤辰治教授（病理学、医学部長、52歳新潟大学）、後列中央、植木幸明教授（42歳、新潟大学脳外科）。この写真は脳研究室の前で撮られた。

この時の脳研究室の入り口に掲げられた研究者名札板。

この自称「新潟大学脳研究室」は翌1957(昭32)年4月、文部省に「新潟大学医学部 脳外科研究施設」として正式認可された。



生田房弘は平澤興先生の紹介でNYC. Montefiore 病院のH.M. Zimmerman 教授のMS research fellowに採用され、1960（昭35）年7月留学。

そこでの毎木曜日午前のDr. Zimmerman's Neurpathology Conference。1962（昭37）年6月撮影。



Montefiore病院病理学部の年一度の集合写真。

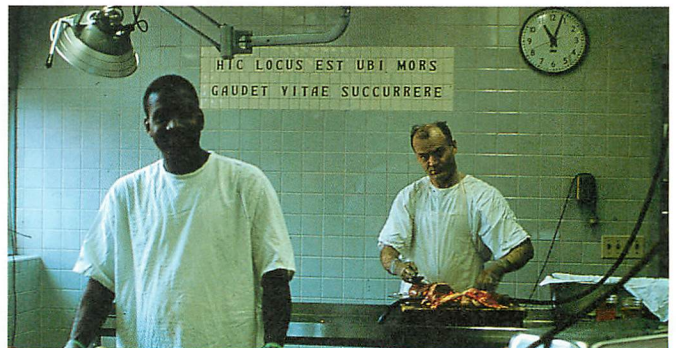
1962（昭37）年6月

Zimmerman先生の右はL.Rubinstein、また左から鈴木衣子、平野朝雄、谷榮一、生田房弘、豊倉康夫先生の顔も見られる。

Montefiore病院病理解剖室の壁にはめ込まれていたRokitansky教授の剖検室に由来するLatin

HIC LOCUS EST UBI MORS
GAUDET VITAE SUCCURRERE

“ここは死が立派に生きる道を導くところ”の意と生田先生は師から耳にした。



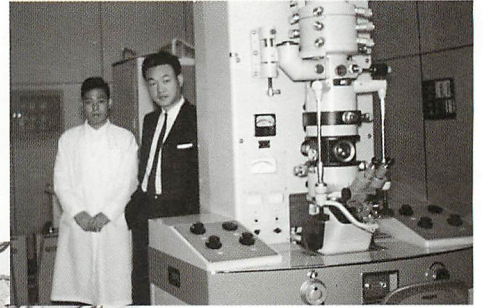
1964（昭39）年8月 生田先生は帰国し、脳外科研究施設形態学部門に所属した。



1965(昭40)年11月頃
形態学部門標本作製室にて。

前列左より市川富夫、江川重公、森谷(渡
辺)ひとみ、後列左から石崎 敬、秩父政夫、
小柳新策、本多 拓、田中政春、久保 宏。

文部省がん特別研究費で生田教授
に交付された透過型電子顕微鏡、
HU-11B型の搬入。



顕微鏡本体。
左は倉田明氏(共通写真室)と
生田助教(当時)



H.M.Zimmerman先生の御来訪。

1967(昭42)年4月8日。

前列左から小宅教授、Zimmerman先生、
生田房弘、後列左から久保宏、秩父政夫、
小川宏、新井弘之、岩崎祐三、小柳新策。



Zimmerman先生と中田
瑞穂先生を囲んで。

1967(昭42)年4月8日。
植木教授室にて。

左から椿忠雄教授、
植木幸明教授(53歳)、
Zimmerman先生(65歳)、
中田瑞穂先生(74歳)、
生田房弘助教(37歳)

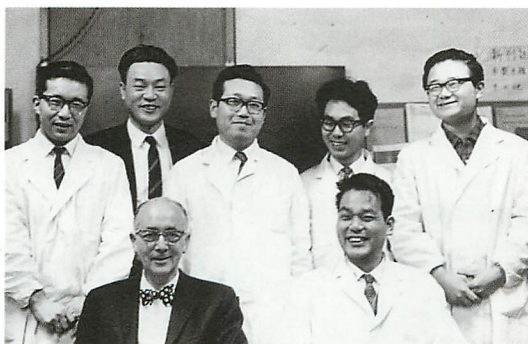
always
 "Things are not what
 they seem." -
 Shakespeare
 J. M. Zimmerman
 Apr. 10, '67

Zimmerman先生が引用されたShakespeareの言葉。
 「Things are not always what they seem.」
 を先生が、生田先生に差し出された医学書院の手帳
 に添付の鉛筆で、書かれた6cmに満たないもの。福
 岡空港にて
 1967(昭42)年4月10日

教室（形態学部門）の面々。
 1967(昭42)年4月13日



この年6月
 「新潟大学脳研究所」に昇
 格し、大学付置の研究所と
 なる。



Harvey Cushing先生の高弟Leo M. Davidoff先生、
 Montefiore病院、の御来訪。

1968(昭43)年1月30日
 後列左から岩崎祐三、生田房弘、新井弘之、秩父政夫、
 小川 宏。

その当時の脳研究所の建物。

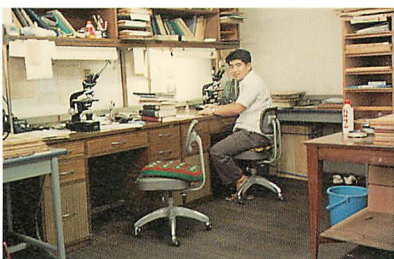




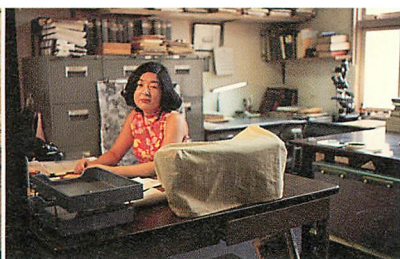
笹川流れを訪れる。家族も誘って。
1970(昭45)年5月



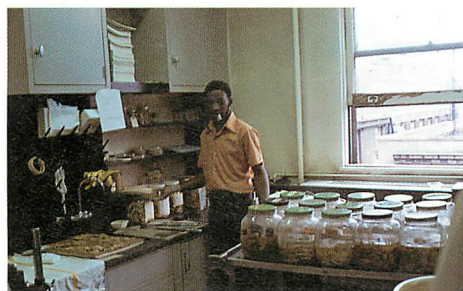
この1970年頃の研究室や事務室。
左から小川 宏、大浜栄作、山村安弘。



小泉隆徳



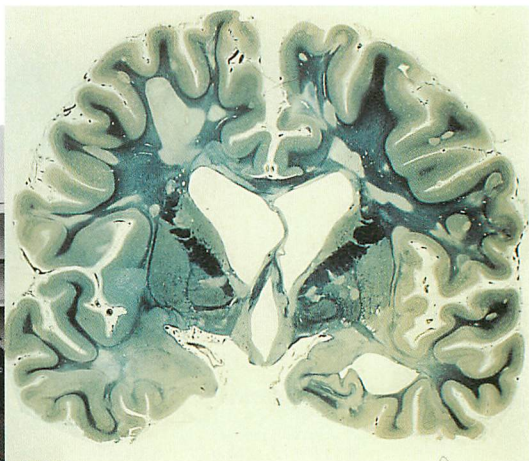
有山(植木)敬子。



日米科学研究協力事業(日本学術振興会)で、
日米の脱髄性脳疾患の病理解剖学的比較検討が発足。

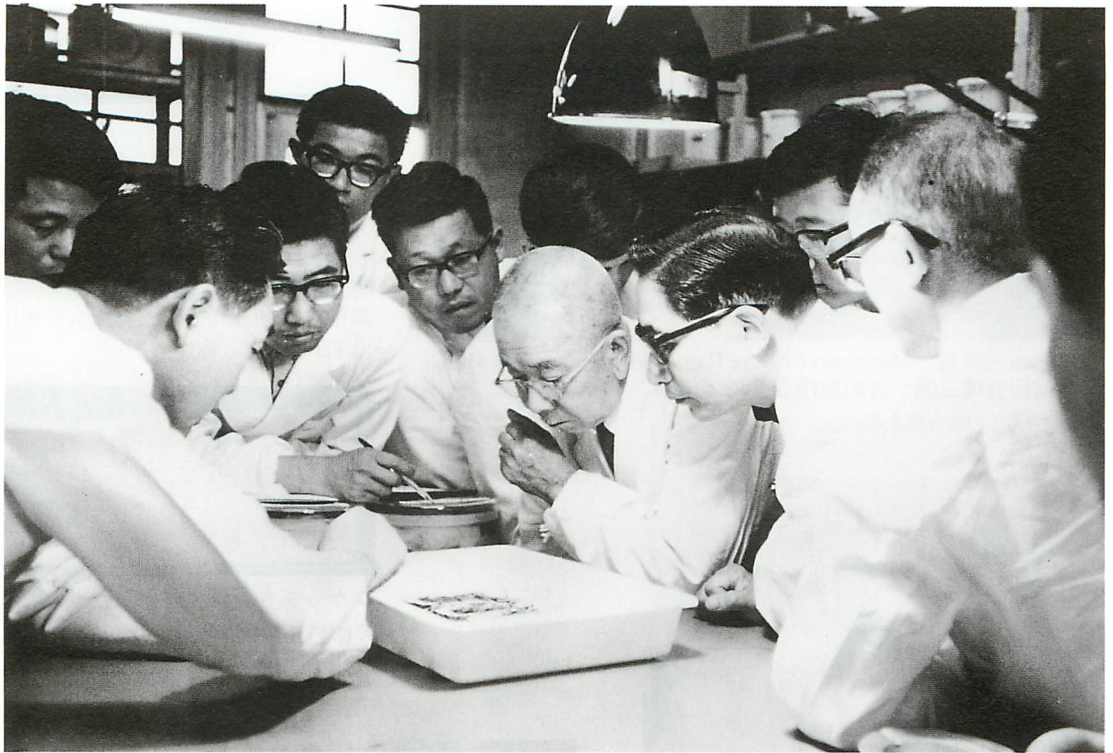
1970(昭45)年5月

石崎敬、田中政春と生田先生がMontefiore病院を訪れ、Zimmerman先生
が収集された140例のMS脳と膨大なデータ並びに標本を検討のすえ供与
された。このboyが毎日脳を運びあげ、もどしてくれた。



多発性硬化症脳の髄鞘染標本。アメリカ人。

前列左から生田房弘、Zimmerman先生、Ms. Elizabeth
Donnary(Zimmerman先生の秘書)、
後列は石崎敬。田中政春はこの時外出?



大脳半球摘除術例のブレインカッティング。
症例は中田瑞穂先生らが14年前に行われた31歳
男性例

1971(昭46)年6月21日

中央に頭髪を短く刈っておられるのが中田瑞穂先生(78歳)、
「Neuro-Gliology」を書かれた年。その右隣に黒髪の植木幸
明脳外科教授(57歳)。さらにその右隣に左横顔のみが見
える病理学の伊藤辰治名誉教授(67歳)。左のブレイカッ
ターは生田房弘助教授(42歳)。

日 程	1.00pm	4.00pm	5.00pm	8.00pm
7月26日(月)	辺 縁 系 の 機 能 解 剖 小池上 春 芳 講 師		筋 収 縮 制 御 の 分 子 機 構 江 橋 節 郎 講 師	
27日(火)	脳 研 究 と コ ン ピ ュ ー タ ー 丸 山 直 滋 講 師		脳 幹 障 害 と 脳 波 中 井 昂 講 師	
28日(水)	グ リ ア 細 胞 が 跳 べ た 脳 の 病 気 生 田 房 弘 講 師		グ リ オ ー ム の 組 織 発 生 に つ い て の 2, 3 の 問 題 点 小 宅 洋 講 師	
29日(木)	薬 物 作 用 研 究 に 於 け る 放 射 性 同 位 元 素 の 応 用 高 橋 康 夫 講 師		ニ ュ ー ロ ン の 機 能 と 化 学 佐 武 明 講 師	
30日(金)	精 神 医 学 の 方 法 病 者 へ の 接 近 と 理 解 の た め に 沢 政 一 講 師		大 脳 半 球 摘 除 術 植 木 幸 明 講 師	
31日(土)	神 經 学 に 於 け る 遺 伝 学 的 問 題 近 藤 喜 代 太 郎 講 師		Babinski 反 射 の 発 見 と そ の 意 義 豊 倉 康 夫 講 師	



第一回新潟神経学夏期セミナーの
日程と演題。

1971(昭46)年6月21日

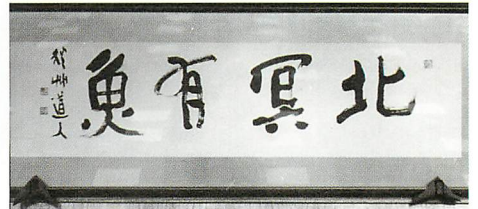
1970年頃から中田先生の「Neuro-Gliology」
という考えかた(新潟医誌85:667, 1971)
が生田房弘助教授らに強い影響を与えていた。

K.J. Zülch教授御来訪、学生講義に参加。杉山
義昭先生のNeuroepitheliomaに強い興味を示
される。

1971(昭46)年11月1日



Gert Peters教授、MünchenのMax-Planck脳研究所長の御来訪。医学部研究棟二階、昔の教授会室にて講演。伊藤辰治先生の顔も見える。



同室に掲げられていた会津八一先生の「北冥有魚」。



スケッチされた全医学部教授の似顔絵。昭和16年有山教授による。上段中央部の入道頭の絵は中田瑞穂教授、下段右から三人目は解剖学の平澤興教授、四人目は法医学の高野素十教授。



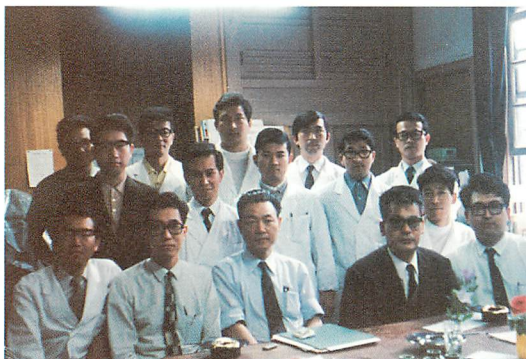
1972(昭47)年1月元旦。白山浦の生田三角郎を訪れた教室の大浜栄作、中村仁志夫の一家。



第13回日本神経病理学会
岐阜市 3月末日-4月1日。
大浜、小柳、古賀、生田、巻瀧、吉村。
1972(昭47)年4月1日。



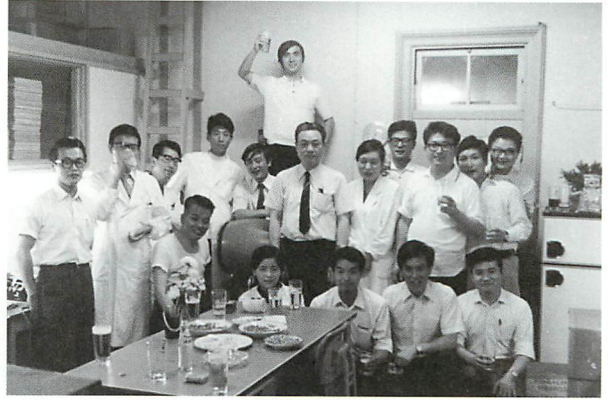
教室（神経病理学部門）の面々。
1972(昭47)年4月20日頃。



1972(昭47)年5月頃。
本館講堂の検討会室にて。



1972(昭47)年 夏のBrain Cutting Room.
旧薬理学教室実験室を改造。このテーブルで
大脳半球摘除術のBrain Cuttingも施行された。



1972(昭47)年 7月頃の標本作製室で。



平野朝雄教授の御来訪。

1972(昭47)年8月28-29日。

中田瑞穂先生のお部屋で。

後方の写真左はWalter E. Dandy,

中はHarvey Cushing。8月28日。



平野先生の錫中毒とmyelin のLecture。8月28日。



弥彦、岩室を訪問。8月29日。



1972(昭47)年 秋の研究室の一部。
渥美哲至と…。



皆で五合庵、寺泊を訪問。
1973(昭48)年4月10日(火)

ASAHI EVENING NEWS,

WEDNESDAY, OCTOBER 3, 1973

Dr. Zimmerman Awarded Sacred-Treasure Order



Dr. Harry M. Zimmerman, with the Second Class Order of the Sacred Treasure pinned to his jacket, and Mrs. Zimmerman talk with Education Minister Seisuke Okuno (back to camera) after the decoration ceremony in the Education Ministry last week.

Dr. Harry M. Zimmerman, the Kanto Central Hospital,

Zimmerman先生の叙勲。
1973(昭48)年9月26。
文部省において奥野文部大臣から勲2等瑞宝章を伝達された。
Asahi Evening Newsの10月3日版の一部。



生田房弘先生の教授就任。

1973(昭48)年8月
その祝賀会は9月28日、Zimmerman先生72歳の誕生日と重なり祝われた。旧イタリア軒。



戸隠、長野県への医局旅行。
1974(昭49)年5月29-30日。





中田瑞穂先生 御逝去。
1975(昭50)年8月18日。82歳。
この8月に脳研究所研究棟が着工。
この写真は前年の1974(昭49)年6月23日
高橋光雄先生が句会で撮られた 81歳2ヶ月の時のもの。

この頃の中田先生のお住まい(借家)。
左側が入り口。西大畑町。



文部省・神経結合研究班(班長萬年甫教授)
の班会議

1975(昭50)年7月11日。

報告会は越前浜の青少年研修センターで、宿泊は岩室村高島屋。萬年班長、中井準之助、藤田哲也先生、並びに植木幸明脳研究所長等の顔が見える。

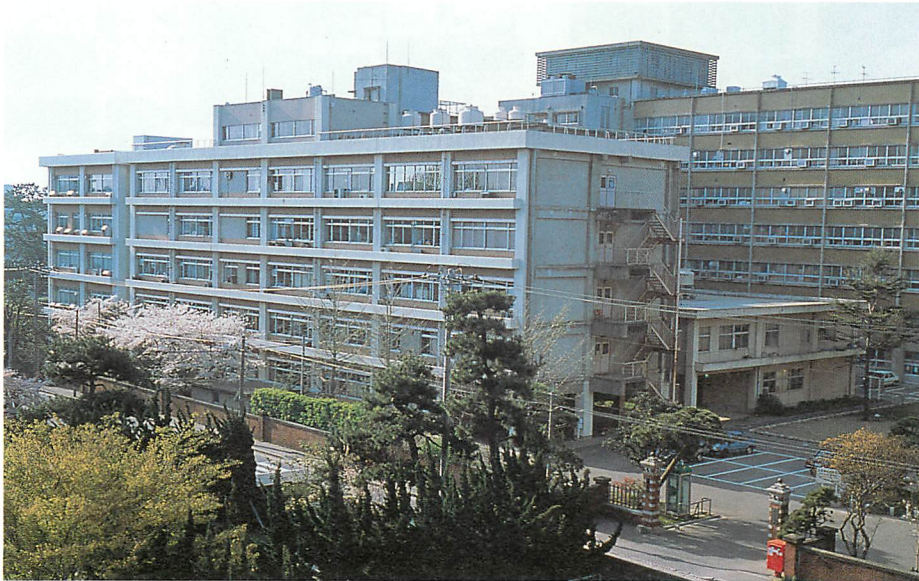
翌18日、中田先生から「私が選んだ絵を萬年先生に見てもらおうように」と貴重な絵がとめの奥様によって生田教授に届けられた。先生はひどく体調をくずしておられるという。



小坂英幸 熊大へ 送別の会。
1975 (昭50)年9月18日。



吉村教曝 Wistar研究所Koprowski教授へ送別の会。
1975 (昭50)年11月6日。



新潟大学脳研究所研究棟
が落成。

1976 (昭51)年3月。
この写真は1986 (昭61)年4月
撮影されたもので、この1976
年時点ではまだ左端2スパン
の動物室と右方の標本センタ
ーは完成していない。



第17回日本神経病理学会 会長生田房弘教授
県民会館。

1976 (昭51)年4月27-29日。

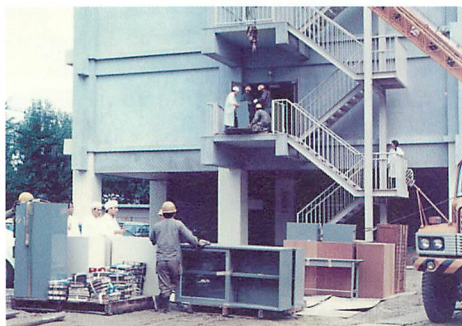


宇奈月温泉を訪れる途中、犀潟療養所に田中政春先輩に表敬。

1976(昭51)年5月9-10日。

落成した新研究棟の右(南)方に、旧泰安殿や少しづつプレハブなどで増築した実験室、電顕室、培養室などがあつた。から松が見える。

1976(昭51)年5月。



新研究棟に移転。

1976(昭51)年5月24-28日。

研究室へは二階建て旧細菌学教室跡の研究室から、実験室へは木造の増築した一階プレハブ部分(右写真右端)から。



そのプレハブの実験室・電顕室にあつた名札板。



新研究棟落成祝賀会に平澤興先生、豊倉康夫教授、伊藤辰治先生、中田とめの奥様、御子息紳一郎氏、などが参集された。



新研究棟に揚げられた脳研究所の看板。



脳研究所の看板出来る。

青銅製。中田先生の文字の復刻。豊倉康夫先生の御紹介で神田一丁目で作製。
1976(昭51)年10月6日完成。

けやきに書かれた中田先生の文字。



標本センター新営工事始まる(1976年8月)。旧奉安殿改造の生理、生化学関係の建物は既に撤去された。から松の木が見える。

1976(昭51)年10月1日撮影。

標本センターは翌
1977年3月に完成した。



第2回上信越神経病理懇談会。

1976(昭51)年11月20日。湯沢
豊の部屋での検討会。川合、川淵、武田、田村等の先生。



平野朝雄先生の御来訪。

1977(昭52)年1月3日。

大雪の正月、葉山でのグリア細胞の検討会に
参加する前。標本センターが工事中。



Brain Cutting 中の一こま。木造の旧細菌学教室の
Cutting Roomで。

中村仁志夫、竹下岩男、山崎一徳ら。

1977(昭52)年3月。



脳疾患標本センターの落成。

1977(昭52)年3月末日。「から松」の位置から「新潟大学脳研究室」(2頁の写真)のあったのは2階のMS-roomの位置であり、集合写真は1階のブレインカッティング室の前で撮られたことになる。この写真は実際は1992年4月23日に撮られたもの。



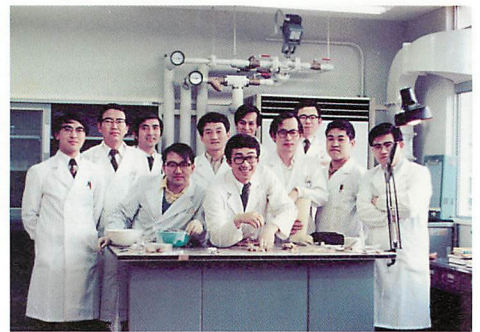
猪瀬正先生。



武谷止孝先生。

学会における先達の先生方。第18回日本神経病理学会総会 会長原田健一教授 松本にて。

1977(昭52)年6月3、4日。



新しいBrain Cutting Roomで。

1977(昭52)年6月。



山形県蔵王・山寺などを訪れる途上、

菖蒲園のある長井市の外田茂雄先生を訪れる。

1977(昭52)年6月10日。



新潟神経学夏期セミナー部門見学でのBrain Cuttingは新設の脳疾患標本センターBrain Cutting Roomで。
1977(昭52)年7月17日。



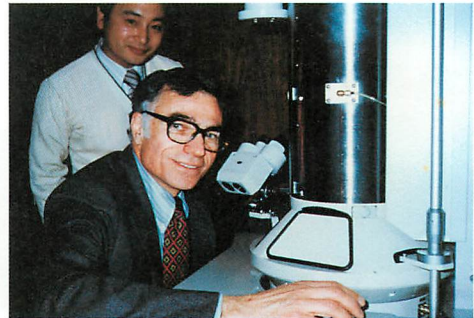
海開き。1977(昭52)年7月28日。



平澤興先生の書「一以貫之」披露の会。生田教授宅 1977(昭52)年9月29日。



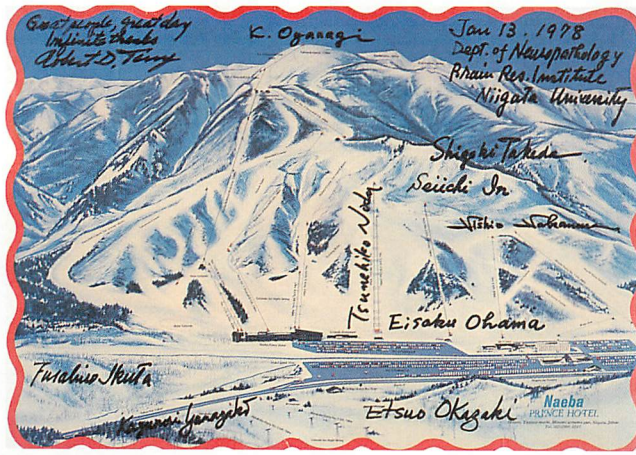
昼休みの散歩に 安吾の碑の前で。
1977(昭52)年 晩秋。



高圧電顕室。

Robert D. Terry教授の御来訪。1978(昭53)年1月11-13日。
Brain Cutting。この後脳神経研究会でのLecture。
夕刻苗場プリンスホテルに向かう。1978年(昭53)年1月12日(木)。





苗場スキー場にて。
1978(昭53)年1月13日(金)。
夕刻湯沢から東京へ。

ALSシンポジウム。
1978(昭53)年2月4日(土)。
医学部大講堂。



皆で鷹巣へ家族旅行。
1978(昭53)年6月4日。

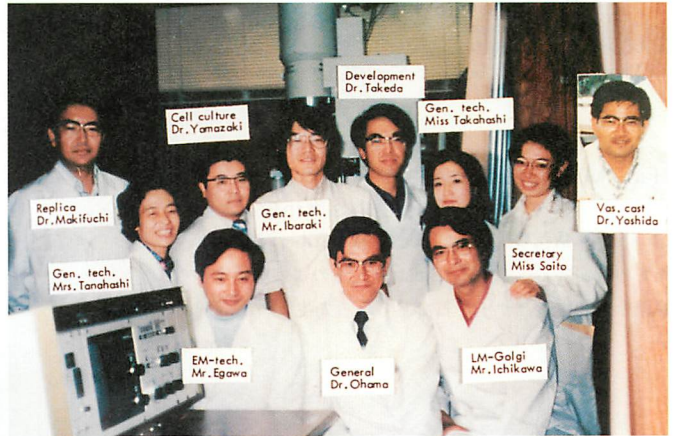


大西禮子先生と金関眞先生から細胞移動のラッフル運動を撮影する方法を教えて戴いた日の夜。生田教授宅にて。

1978(昭53)年8月25日(金)。

第8回国際神経病理学会Washington D.C. 9月24-29日の会場になったThe Shoreham Americana Hotel。

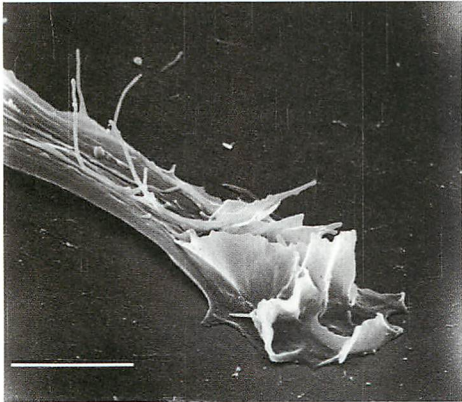
1978年(昭53)9月。



9月下旬の第8回国際神経病理学会ワシントンでの会長シンポジウム、「アストロサイト」に報告する生田教授をサポートしてくれた人達。講演の最後に映写された写真。

1978(昭53)年9月29日の会長シンポジウム、「アストロサイト」で提示したアストロサイトのラッフル運動。

Barは5micron。山崎一徳培養、江川重公技官撮影。



Zimmerman先生のカントリーホームに招かれて過ごす生田教授。

9月30日-10月2日
1978(昭53)年。

その広い庭と小さな家。

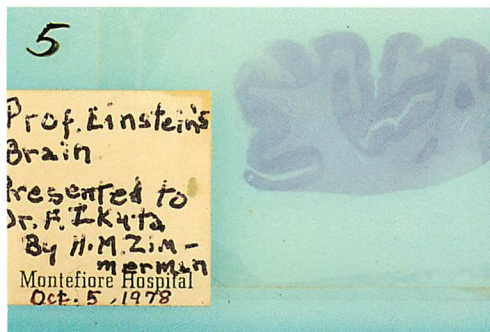


9月28日の学会BanquetでのZimmerman先生のテーブル。

1978(昭53)年9月28日

この日がZimmerman先生の77歳の誕生日で、そのお祝いも兼ね特別のテーブルが学会から用意された。会長の平野先生御夫妻、生田教授御夫妻、小川勝士先生、Chau先生御夫妻など。





A.Einstein先生の大脳標本。Nissl染。

Harry M.Zimmerman先生。

1978(昭53)年10月5日撮影。
Montefiore病院の先生のOffice。背後にAlbert Einstein先生の像がある。Albert Einstein先生のこの脳標本の管理を委託するとサインしておられる先生。



昼休みに再び、「ふるさとを語ることなし」の安吾の碑に。

1978(昭53)年11月22日(水)。

6年間続いた文部省がん・脳腫瘍研究班(班長伊藤辰治先生)最後の班会議/新潟大脳研究所。

1978(昭53)年11月24日(金)。

左方に石田陽一、山口、右方に内田、矢部芳郎、井田憲明、松本悟などの先生が見える。





第4回上信越神経病理懇談会 新潟
1978(昭53)年11月25日(土)。



送別の会：小林(尹)清市、竹内幸美、大西洋司、黒沢明充
並びに茨木君。小林：久留米大へ、竹内：新潟市民病院へ、
大西：山形大へ、茨木君：桑名病院に。

1979(昭54)年3月29日



歓迎会：高橋 均、井関榮三、茂木崇司、阿部 聡。

1979(昭54)年4月10日。



第20回日本神経病理学会総会。会長石田陽一教授
前橋

H.M.Zimmerman先生(78才)とK.J.Zülch先生、
Max-Planck Inst., Köln.

1979(昭54)年5月24日。



H.M.Zimmerman先生の御来訪。

1979(昭54)年5月26日-6月1日。

第1回新潟脳神経腫瘍セミナー 5月27日。高倉公明教授、平野朝雄教授、小川勝士教授、谷 榮一教授らと。



走査型電子顕微鏡室で。5月29日。



ブレインカッティング室で。5月30日(木)。



医局旅行で弥彦、岩室に。高島屋にて。

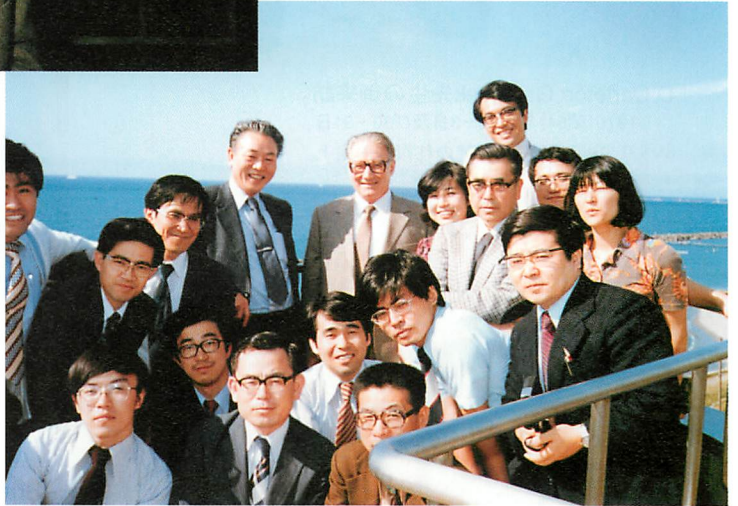


Zimmerman先生と教室の人達。
1979(昭54)年5月27日。





Franz Seitelberger教授と
白木博次教授の御来訪。
1979(昭54)年6月11-12日。
Franz Seitelberger教授。



両先生と昼休みに日和山の展望台を訪れた。

巻淵隆夫Guam島NINCDSに着任。
1979(昭54)年7月6日(金)
新潟発、Guam空港にて。



井形昭弘教授を新潟駅に教室の人々と見送る。
新潟神経学夏期セミナーの初日最後に「神経疾患と免疫」
と題する2時間のレクチャーの夜、大阪行き特急寝台列車に。
1979(昭54)年7月21日(土)



D.Carleton Gajdusek先生の御来訪。
1979(昭54)年8月2-3日及び30-31日。
シベリアviliuisk脳炎研究の往復路の途上。



大浜先生いってらっしゃい。
1979(昭54)年8月25日。
大浜榮作文部省在外研究員としてアメリカ留学
(平野朝雄教授、およびR.D.Terry教授)に出発。



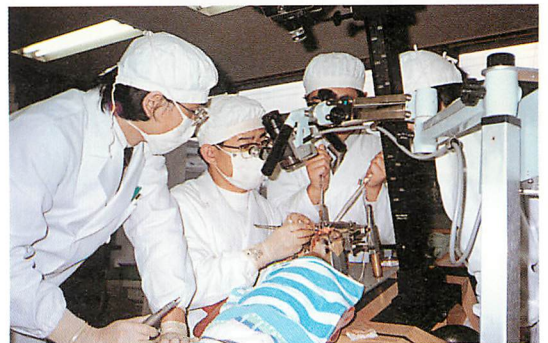
Brain Dissection Workshop,ウィーン、NIH主催。
生田教授、巻瀧隆夫と出席。

1979(昭54)年9月12-18日。



Seitelberger教授御夫妻のウィーン郊外の、ドナウ河
を見おろすcountry houseに生田教授招かれる。

1979(昭54)年9月15-16日。



いわゆる酸素欠乏症と純酸素欠乏症の実験的研究。
1979(昭54)年12月頃の実験室。



岡崎悦夫送別会 1979(昭54)年12月26日。
新潟市民病院病理部へ赴任。



研究室から見た雪の付属小・中学校、日本海タワー。
1980(昭55)年2月15日。



小川 宏送別会。
1980(昭55)年3月27日(木)。
4月から桑名病院に病理部を設立の為に、赴任。



植木幸明教授御退官。脳研究所
研究棟ピロティにて。
1980(昭55)年4月1日(火) 大安の日



教室(神経病理学部門、
実験神経病理学部門、
脳疾患標本センター)の面々。
1980(昭55)年4月24日(木)。



教室の花見。鳥谷野瀉にて。
1980(昭55)年4月24日夕刻。



寒い。



医学部大運動会。

1980(昭55)年5月24日。

この年から退官まで生田教授は陸上部員と
共に運動会の審判長を務める。澤政一病院長と。



教室の面々



島倉(関本)里美さんと生田教授。



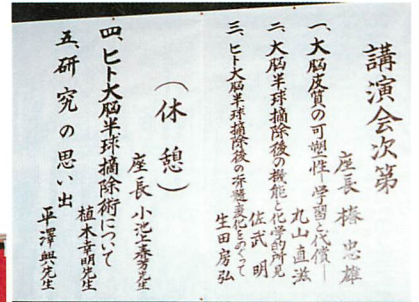
胎内医局旅行。

1980(昭55)年6月7日(土)。



講演会場。

植木幸明先生退官記念講演会。
1980(昭55)年6月14日(土)。

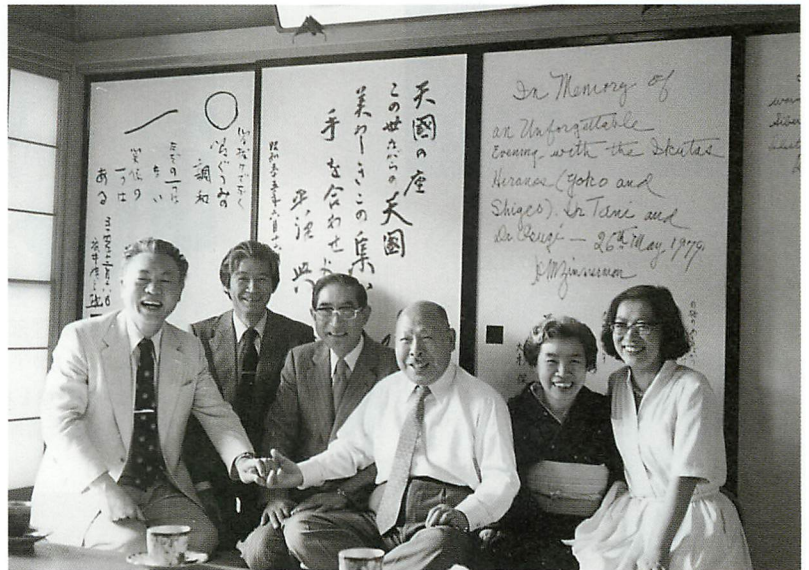


講演会次第。



祝賀会(大講堂)。
平澤 興先生、猪初男学長、北村四郎先生
らを囲んで。

平澤興先生を囲む朝がゆの集い。
1980(昭55)年6月16日(月)早朝。
植木幸明先生、中田とめの奥様、
生田教授宅にて。
松井朋子さん撮影。



新潟神経学夏期セミナー
部門見学でのブレインカッティング。
1980(昭55)年7月25日。

Experts map out fight against diseases

By VICTOR SAYMO
Daily News Staff

A team of medical experts involved in fighting lytico and bodig, two diseases prevalent on Guam, met at the Guam Memorial Hospital this week to map out a strategy in the battle against the illnesses.

The strategy agreed upon includes the construction of a new building for the local research branch of the National Institute of Neurologic Communicable Disorders and Stroke, hiring of additional medical and technical personnel and the acquisition of a computerized tomography scanner.

Among experts who drafted the plan was a Nobel Prize for Medicine awardee, Dr. Carleton Gajdusek.

Dr. Thomas N. Chase, one of the medical researchers who took part in the marathon planning session, said it was held on Guam because "it is here where the action is. If we unlock the secret (of the diseases) on Guam, we can unlock the secret elsewhere."

It is estimated that Guam has as much as 50 percent more incidence of lytico and bodig than the rest of the world. Lytico (Amyotrophic lateral Sclerosis or ALS) and bodig (Parkinsonism Dementia or PD), diseases which attack the nervous system, are found in as much as 10 percent of Guamanians. There are no known causes or cures.

The experts also met with Gov. Paul M. Calvo who agreed "in principle" that the planning for the new research building proceed, according to Chase, scientific director of the institute's Washington, D.C., headquarters.

However, there are still some legal problems, he said. Hospital construction involving sums above a certain amount have to be cleared with the Guam Health Planning and Development Agency. GMH has filed a waiver



This group of doctors is visiting Guam from the National Institute of Neurologic Communicable Disorders and Stroke to help establish a way to battle two common diseases on Guam. They are, from left to right: Dr. Fusahiro Ikuta, professor of neuropathology; Dr. C. Joseph Gibbs, senior virologist; Dr. Carleton Gajdusek, Nobel Prize winner; and Dr. Thomas Chase, scientific director.

for the clearance but there are no indications yet whether it will be granted, Chase said.

Despite this, Chase was enthusiastic about the project. "We

said he would try to break through the red tape, Chase said.

Pending completion of the new institute building, the scanner, a device which takes X-ray-like pictures of dif-

people in an inaccessible part of Indonesian New Guinea which he said are very similar to lytico and bodig.

The species of the disease which occur on Guam, particularly in the

PACIFIC DAILY NEWS, Friday, August 1, 1980

Guam島のALS-PDに関する日米共同研究の打ち合わせ、主催NIH,Guam島にて。

Pacific Daily News 8月1日号に掲載された打ち合わせのニュース。左から生田教授、Joseph Gibbs, D.Carleton Cajdusekおよび Thomas Chase.



帰国を間近に控えてのGuamでの巻瀧隆夫一家。
1980(昭55)年7月末日。



桑名病院神経病理科拡張にgoサイン。
植木幸明先生は4月から桑名病院に移られたが、既に新井弘之先生はそこで脳外科診療を着実に発展させつつあった。1980(昭55)年9月19日。桑名病院病理科にて。



樺忠雄教授退官記念講演会。
1980(昭55)年9月20日。
樺教授は都立神経病院に赴任のため退官。



樺先生 送別の時。
この時点での脳研究所教授全員。
この月に田中隆一教授が誕生(右端)。



小柳清光Guamに出発。新潟空港にて。
1980(昭55)年9月25日。



大浜栄作、巻淵隆夫 両助教授の就任祝賀。
並びに王慕一、織田哲至 歓迎会。
1980(昭55)年10月23日。



鈴木邦彦先生御来訪。1980(昭55)年11月1日。



桑名病院神経病理部発足披露の日。
1980(昭55)年11月8日発足祝賀の日。



日本脳神経外科学会 金沢 早朝セミナーで生田教授は永田伴子と「小児脳腫瘍の予後について」報告。

1980(昭55)年10月17日。
この時の金沢市の観光ポスター御神事太鼓に
いたく感激。



第6回上信越神経病理懇談会。新潟。
1980(昭55)年11月22日。

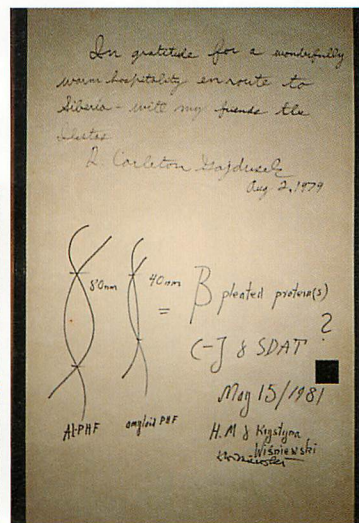


元旦の研究室。
1981(昭56)年1月1日。
脳外科の先生方の顔も見える。



教室の面々。
1981(昭56)年4月23日。

第22回日本神経病理学会総会 会長 立石潤教授
福岡の機会に同門集い。1981(昭56)年5月10日。米沢先生は迷い込み。



Henryk M. and
Krystyna Wisniewski
御夫妻の御来訪。
1981(昭56)年5月15日。





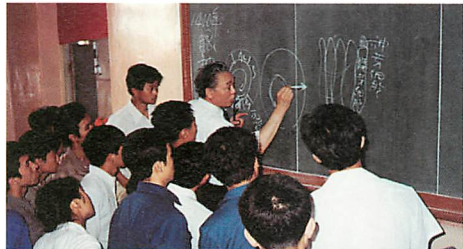
臓器整理。

1981(昭56)年5月27日。
 右向こう、現在の医学部新研究棟の位置に、かつて野口英世も訪れた
 医科大学時代の2階建ての細菌学衛生学教室の建物が見える。1976年
 (昭51)まで、ここを実験神経病理学部門の研究室とし、それ以後は脳
 研動物室として1986年(昭61)まで使用していた。その手前に当初歯学
 部の事務室として、後に1986年(昭61)まで脳研究所動物室として利用
 していたプレハブの建物も見える。



新潟市民病院長 荻間 勇団長のもと、医学部
 大西義久教授と生田教授が中国ハルビン医科
 大学や北京等に、親善学術講演に新潟医学会
 から派遣。 1981(昭56)年6月5-14日。

ハルビン医科大学で講演会のあと脳の発生について
 質問せめ



北京友誼医院にて。



毎週木曜日午前中に休みなく続けられた
 神経病理カンファレンス。

1981(昭56)年5月28日(木)撮。



高橋 均New York A.Einstein大学
 鈴木衣子先生のもとに留学の歓送会。

1981(昭56)年7月2日。



Dr.K.Zülch先生の御来訪。

1981(昭56)年9月17日。

国際神経学会議、京都、9月18-24日の帰途。



平野朝雄先生の御来訪。
1981(昭56)年10月14日。

昼食会を実験室で。



学生実習室で。



大藤先生Guamで頑張って来て！忘年会の日。
1981(昭56)年12月25日。



出雲周二一家 鹿児島大学に出发。
1982(昭57)年1月4日。



元気で！



楊玉華さんの中国料理講習会。
1982(昭57)年1月30日(土)、生田教授宅にて。



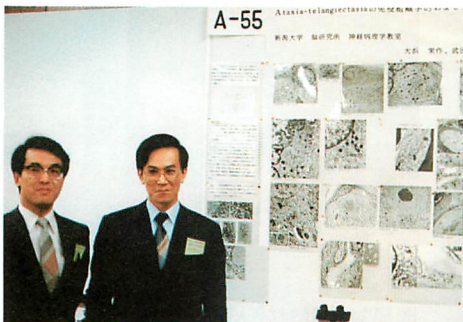
王慕一一家。楊玉華、王曉禕。
帰国の年の。
1982(昭57)年12月12日中国で撮影。

王慕一送別会。白山会館で。
1982(昭57)年3月11日。

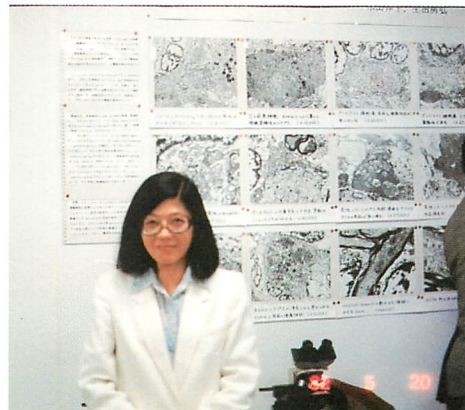


教室(神経病理学部門と
実験神経病理学部門、
脳疾患標本センター)
の面々。
1982(昭57)年4月15日(木)。

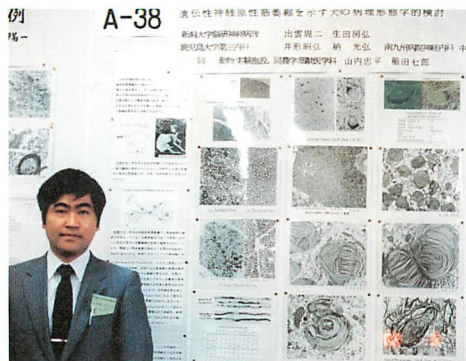
第23回日本神経病理学会総会
会長 高畑直彦教授 札幌。
1982(昭57)年5月19-21日。



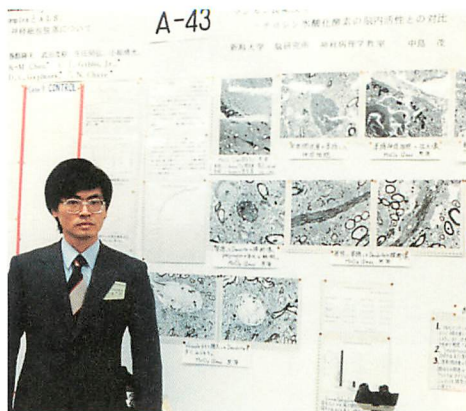
大浜、武田らのAtaxia-telangiectasia。



永田伴子らの視神経変性。



出雲周二らの ALS様の犬。



中島茂らのマンガンとチロシン水酸化酵素。



松本陽のマクロファージ。



吉田泰二らの血管鋳型。



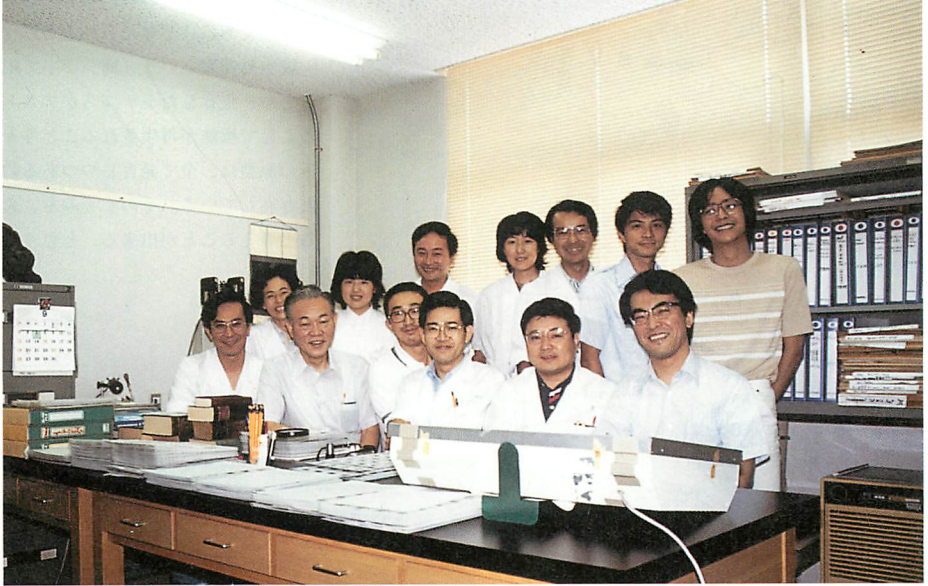
新保義勝らの血管内皮細胞。



医局対抗戦対婦人科。勝ち。
1982(昭57)年7月1日。



ウィーンの国際神経病理学会を前に
緊張した日々の実験室。脳edemaの実験。
1982(昭57)年春。



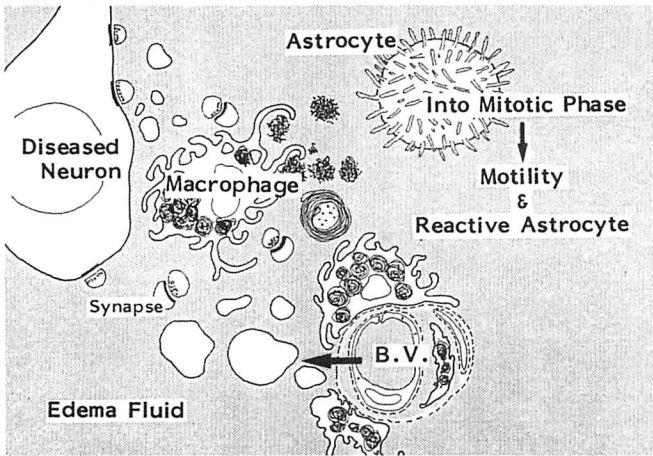
ウィーンでの第9回国際神経病理学会シンポジウム。
Blood-Brain-Barrierと脳の発生、そして病巣修復の実験 がほぼ初期の期待に
近づき始めた頃。1982(昭57)年8月19日頃。脳疾患標本センターMS roomにて。
左手前から、大浜、生田、小柳、吉田、武田、後列、棚橋、島倉(関本)、江川、高江(長谷川)、
市川、小林、渡部。



第9回国際神経病理学会
(1982(昭57)年9月5-10日)
会長 F. Seitelberger教授の
Opening Ceremonyでの
Welcoming address. Wiener Hofburgにて、ウィーン。9月5日5:30pm



シンポジウムBlood-Brain-Barrier
(9月7日)が行われた会場。



シンポジウムBBBでの生田教授の発表。

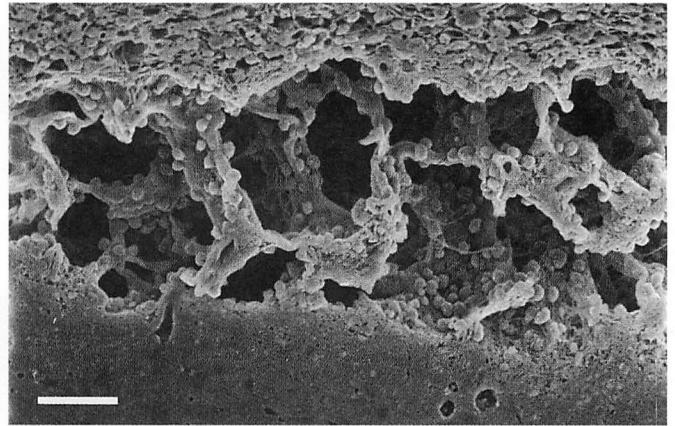
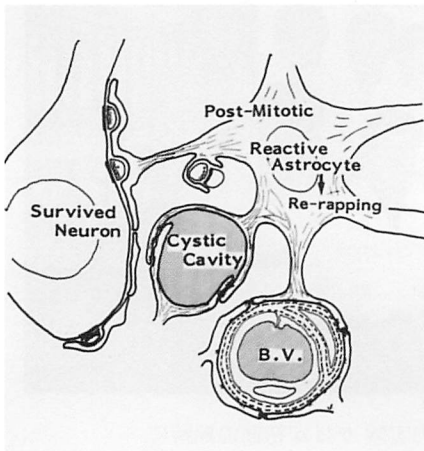
1982(昭57)年9月7日(火) 午前。

脳浮腫液は「間」なのであろう。その中でマクロファージは動き、死細胞を除去出来るようになる。

また、アストロサイトは其中で細胞分裂を行うことで移動能を獲得し、生きているシナプスや血管を求めて移動し、それらを再被覆する。かくして機能は再生し、病巣は修復されてゆく。

従って脳浮腫は巧妙に自然が創り出した病巣修復の第一段階である。と考えられると思う。

細胞外間隙という「間」の中で細胞移動が可能になることや、生存したシナプスがアストロサイトに被覆されることで機能が再生されること等々、あらゆる脳のしくみの原型は、全て発育しつつある胎児の脳の中にもともと存在している。そのしくみを、大人の脳が模倣していると考えることが出来る、と思う(生田)



地下室でのBanquet.

1982(昭57)年9月9日夜。



学会の帰途。アテネ、イタリー、アルプスを越えてスイス、パリを訪れロンドンで皆帰途に着く。高橋均はニューヨークへ。アテネ パルテノン神殿を後ろに。

1982(昭57)年9月12日(日)。



いわゆる酸素欠乏班がスタート。純粋な酸素欠乏実験が多忙を極めた実験室。

1982(昭57)年12月。



大藤高志Guam島での研究から帰国。PD Complexの発生していた土地のひとつ。

1982(昭57)年12月9日。



ミラノ駅イタリーにて。

1982(昭57)年9月(木)。

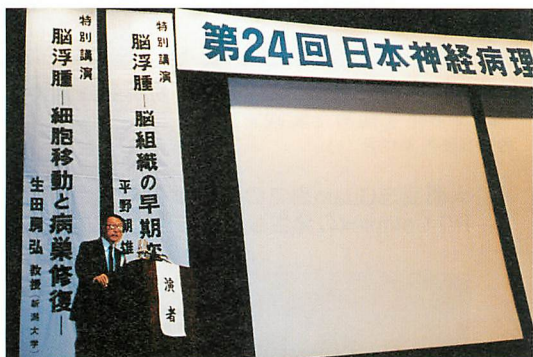


その歓迎会。

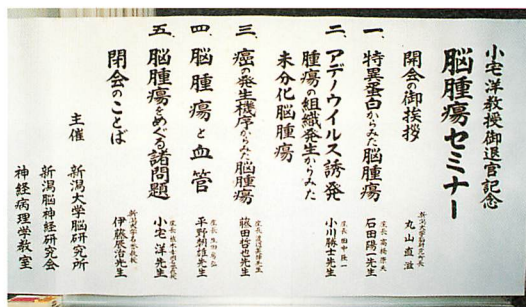




教室の面々。
1983(昭58)年4月15日。
(小宅 洋教授は3月末
に御退官。後任教授選考中。)



第24回日本神経病理学会 名古屋。
1983(昭58)年5月16-19日。



小宅 洋教授 御退官記念脳腫瘍セミナー。
1983(昭58)年5月21日。



医局対抗野球対第三内科。
コールドゲーム勝ち。
1983(昭58)年6月14日。



医局対抗野球対第一内科。勝ち。
1983(昭58)年9月9日。



そのあと。



第9回上信越神経病理懇談会 新潟。
1983(昭58)年11月26日。



新潟脳神経研究会 第200回定例研究会。

1983(昭58)年12月4日

平澤 興先生、萬年 甫先生、橋林博太郎先生等御来演。並びに伊藤辰治先生、小池上春芳名誉教授、植木幸明名誉教授並びに中田瑞穂先生のとの奥様など。



新潟脳神経研究会第200回定例研究会での
萬年 甫先生。



新年御用初めのお茶。
1984(昭59)年1月4日。



窓外の雪。



向井紀二先生御夫妻御来訪。

1984(昭59)年5月7日。翌5月8日RetinoblastomaのLecture。



中島茂送別の会。金沢大学神経内科へ。

1984(昭59)年2月16日。



教室の面々。

1984(昭59)年
4月26日(木)。



脳腫瘍病理学Lucin J. Rubinstein先生と
Scott R.Vandenberg先生の御来訪。

1984(昭59)年5月23-24日。

いつもの神経病理検討会にて。



その前夜。



第25回日本神経病理学会総会
会長 藤澤浩四郎先生 調布市。

1984(昭59)年5月16-18日の際。
武谷止孝先生を囲んで。左から高橋均、
豊倉康夫先生、生田房弘。



松本 陽、井関榮三の送別会。
松本・新潟大医動物(免疫)
教室へ。井関・横浜市立大精
神科へ。

1984(昭59)年6月14日。



第17回日本整形外科学会 骨軟部腫瘍研究会での生田教授の講演「末梢神経腫瘍の病理」データーをまとめ上げた時。

1984(昭59)年7月18日。MS roomにて。
前列左から生田、高橋、渡部、後列、江川、
高江(長谷川)、島倉(関本)、市川。



SSPE治療実験打ち合わせに生田教授が大阪大学細胞工学センター岡田善雄教授を訪れる。

1984(昭59)年9月21日。
右は阪大微研の上田重晴先生、左はセンターの内田驍教授。



私の恩師—北から南から—

伊藤辰治先生

いくた ちか ひろ
生田 房弘

新潟大学教授 脳研究所 神経病理学

在りし日の伊藤辰治先生。78歳のとき
(御息 伊藤勝也氏の御厚意による)

伊藤辰治先生は、新潟大学医学部病理学教室の教授として、脳の病理学、なかんづく脳腫瘍の病理学を、おそらく本邦では初めて、本格的に専攻された先

伊藤辰治先生御逝去。

1985(昭60)年1月17日。

先生のブレインカッティング
1985(昭60)年2月14日。



伊藤辰治先生を偲ぶ集い、ホテルオークラ。
北村四郎、赤崎兼義、宮地徹、島田晋の4先生をお迎えして、
大西、渡辺両先生御夫妻と生田夫人。

1985(昭60)年3月9日。



高橋優子 送別の会。

1985(昭60)年3月28日。



若林孝一歓迎の会。白山会館。

1985(昭60)年4月25日。



同日御来所の永井克孝客員教授と共に3次会。



東独のWerner Jänischと小川勝士両教授が御来訪。脳腫瘍lectureののち。北方文化博物館に。

1985(昭60)年6月8日。

あらゆるものが自由なことにJänisch教授は本当に喜ばれる。



五か浜にて。6月9日。



五合庵にて。6月9日。



第15回新潟神経学夏期セミナービアパーティー。

1985(昭60)年7月25日。

臓器整理。標本センターピロッティーにて。

1985(昭60)年10月23日。

これ以後は実験神経病理学部門と標本センターだけで全ての解剖関係業務を施行して行くこととなる。



1985(昭60)年9月30日。熊西敏郎先生神経病理学部門教授に決定。

以後、熊西教授の御意向で、「当分のあいだ」神経病理学部門は解剖はせず、神経病理学部門と実験神経病理学部門の人、予算、スペース、検討会、等々全て明確に区別することとなった。ただ、市川、小林技官の標本作成業務は、三井非常勤職員の給与を実験神経病理学部門が負担することを交換条件としてしばらく継続することになった。



小児脳腫瘍のLucy B.Rorke教授、Philadelphia御来訪。教授会室にて。
1985(昭60)年10月28日。



第11回上信越神経病理懇談会 世話人大江千廣教授。前橋での対抗野球試合。

1985(昭60)年11月3日。
この後、対抗野球に対し、Rorke杯がPhiladelphiaから贈られて来た。



熊西教授就任祝賀並びに忘年会。かき正にて。
1985(昭60)年12月26日。



教室分離が進行中、ほぼ完了に近づいた
1986(昭61)年4月14日時点での両部門合同の名札。



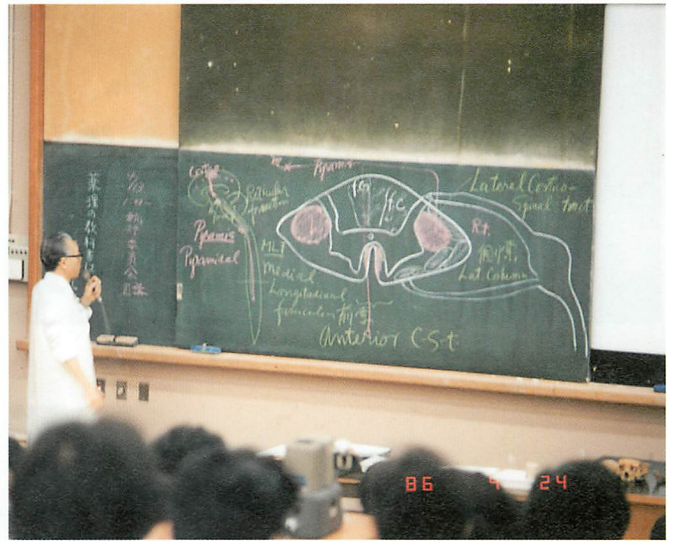
両部門の分離が完了した実験神経病理学部門の名札板。
1986(昭61)年5月6日撮影。



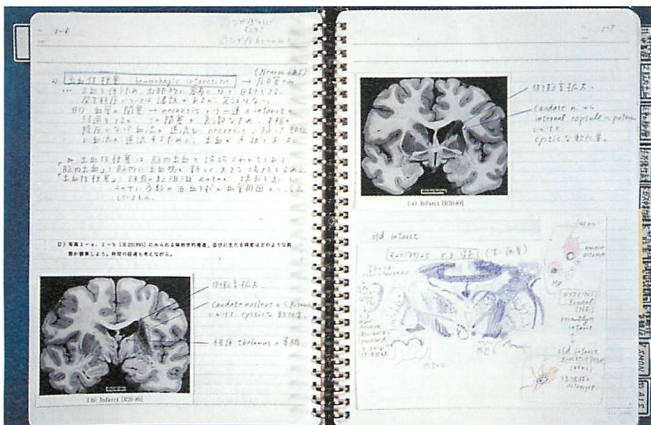
その新しい名札は生田教授室の前壁に架けられた。



最初の実験神経病理学部門と標本センターだけの面々。
1986年(昭61)年4月24日。



学生講義中の生田教授。
1986(昭61)年4月24日午前。



一学生が作成した。プリント、肉眼、ミクロをすべて合わせたノートの一ページ。



実習室にて。

1986(昭61)年4月25日午前。



神経学夏期セミナーの第2日「脳の老化の生物学」
司会の豊倉康夫先生。後列左から朝長正徳先生、
生田房弘所長、井原康夫先生、北本哲之先生。



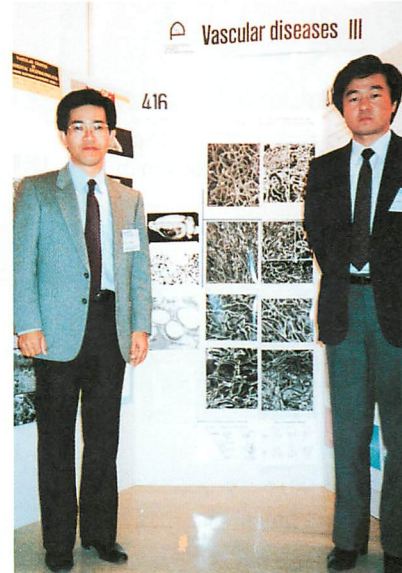
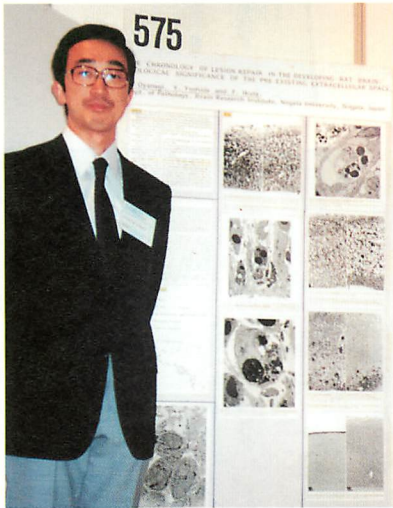
第5回北日本脳神経外科セミナー。会長田中隆一教授
妙高赤倉ホテル。1986(昭61)年8月22日。

帰途に着く時。植木先生との最後の旅となる。

左から生田房弘教授、植木幸明先生、新井弘之先生。



第10回国際神経病理学会、Stockholm。
1986 (昭61) 年9月7-12日での発表の一部。





第10回国際神経病理学会でのReception、
ノーベル賞授賞式のThe Stockholm
City Hallにて。

1986 (昭61) 年9月8日(月)20時より。



Stockholm さよならパーティー、
学会最後のタベ、 Stockholm 市郊外にて。

1986 (昭61) 年9月12日。

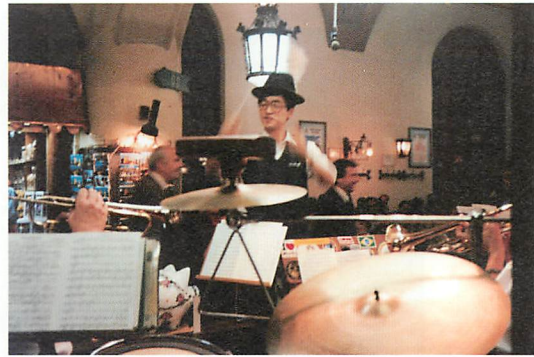


学会後まずMax-Planck Institute (往年のDeutsche
Forschungsanstalt für Psychiatrie in München) を訪れる。
かつて1929年、Zimmerman先生と平澤先生と共にWalther Spielmyer先生
の元で学ばれた研究室を目指し訪れるも、日曜のため入所叶わず。

1986 (昭61) 年9月14日。

同Max-Planck Institute。後日、G.Kreutzberg教授に
生田教授が案内された1993年10月撮影したもの。





Zimmerman先生と平澤先生が共に訪れられた筈の
ビヤホールHofbräuhausを訪れる。若林孝一のタクトで
9月13日(土)。



Romantik Strasseを行く。Rotenburgにて。
1986(昭61)年9月15日。



Heidelberg 到着。Heidelberg大学病理解剖室を見学。その夜…。



山崎一徳、茂木崇司送別の会。
山崎：桑名病院脳外科へ。茂木：木戸病院へ。
1986(昭61)年9月25日。





鹿児島大学第三内科 井形昭弘教授開講
15周年祝賀記念講演会に生田教授が「脳
疾患は生命の歴史を知っている？」を講
演のとき。
出雲周二と。鹿児島大学にて。

1986(昭61)年10月28日。



G.Kreutzberg教授の御来訪。顔面神経切断術
式のデモ。実験室にて。1986(昭61)年10月30日。



第12回上信越神経病理懇談会。新潟。
1986(昭61)年11月1日。



懇親会かき忠にて。かき正の女将さんと中田先生の絵を。



会場にて。



対抗野球試合。 Rorke 杯は石田教授に。



植木幸明先生急逝さる。1986(昭61)年11月24日(72歳)。
先生はこの机にこのお姿でお亡くなりになっておられましたとのこと
(写真は須美子奥様の御厚意にて)。



新保義勝 送別の会。新潟大脳神経外科へ。
1987(昭62)年3月27日白山会館。



平澤興先生とZimmerman先生が大勢の教え子達に囲まれて再会。
両先生は二人が58年前の1929（昭4）年に学ばれたSpielmyer教室の在籍者名簿のコピー（Kreutzberg所長より贈られたもの）と一緒にビールを飲んだビアホールのティッシュ等を添付した色紙に寄せ書きをした色紙をもっておられる。友情は58年前にさかのぼる。

1987（昭62）年3月29日。
その寄せ書き。



1929（昭4）年4月
Spielmyer教室で撮影された58年前の写真。
1979（昭54）年6月2日に平澤先生がZimmerman先生に“覚えてるかい”と言って贈られた写真。中央部に平澤先生、右側でZimmerman先生は立っておられる。手前には座ったOpalski先生。左には標本作製の有名なGrombach夫人が見える。



Spielmyer教室の標本作製検鏡室の写真。
58年前に撮影された。

1995(平7)年3月26日の新潟脳外科病院ブレインリサーチセンター開所式の記念に、Max-Planck Inst. MunchenのG. Kreutzberg所長から生田教授に贈られたものから複製。この部屋は今日も大きな窓のままあるが、内容は分子生物学に変わっている。1929(昭4)年に撮られた左頁の写真はこの手前の窓際で向こう側から撮影された筈である。



永田伴子 送別の会。東大医科研へ。 1987(昭62)年4月2日。



教室(実験神経病理学部門と脳疾患標本センター)の面々。

1987(昭62)年4月16日(木)。

この年も桜と共に神経病理学講義
実習が始まる。

最初はいつも「病理学」について。

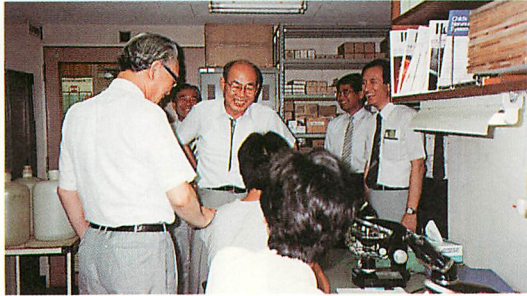
1987(昭62)年4月17日。





医局対抗野球、勝敗不明。 1987(昭62)年7月10日。

大原慎司。送別の会。信州大へ。
1987(昭62)年7月30日。



SSPEのサル治療実験打ち合わせに、大阪大学細胞工学センター岡田善雄教授、阪大微研上田重晴先生、阪大人間工学部糸魚川教授と御来訪。教室廊下で。
1987(昭62)年8月4日。



吉田泰二 送別の会。 1988(昭63)年3月31日。
4月から神経病理学部門に移籍。

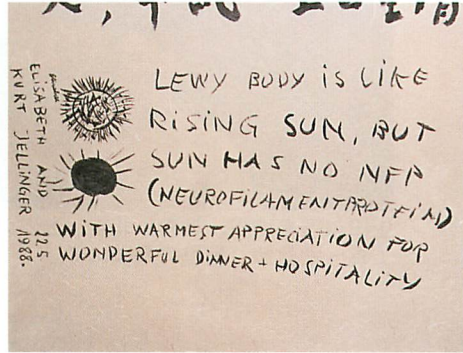


G.Kreutzberg教授及びK.Jellinger教授御夫妻御来訪。
岩室温泉高島屋にて。 1988(昭63)年5月24日。



弥彦山頂上にて。 1988(昭63)5月24日。

Jellinger教授が5月22日夜
ふすまに書かれた手書き。



北方文化博物館を訪れる。 1988(昭63)年5月25日。



第18回新潟神経学夏期セミナー 第一日の佐野 豊先生、萬年 甫先生。佐野先生はセロトニンニューロンについて、萬年先生は脳地図への道と題して。座長の布施栄明教授と熊木克治教授並びに生田脳研究所長。

1988(昭63)年7月13日。



生田教授は王慕一先生の盡力で中国医科大学に招かれた。その際、長春の白求恩医科大学の劉多三教授を訪れBalo氏病の標本を観察させてもらう。

左から林世和教授、饒明俐教授、一人おいて劉多三教授、一人おいて生田教授、その右は蘇 牧、右手笠張早先生。

1983(昭63)年8月9日。



生田教授を瀋陽、長春、北京、上海の全行程を案内してくれた王慕一助教授。萬里の長城にて。 1988(昭63)年8月12日。



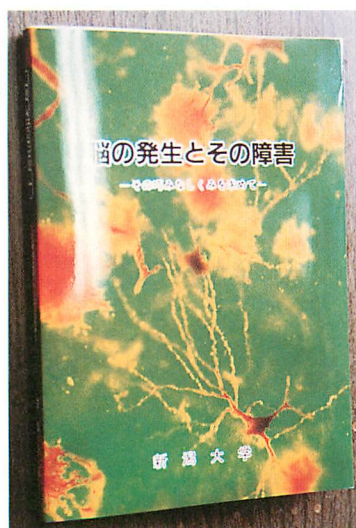
実験室で剖検脳の処理。Medulloblastoma

1988(昭63)年9月30日(金)。

左から江川重公、島倉(関本)、高江(長谷川)、若林。



事務室の村山佳代子。1988(昭63)年9月頃。



9月始めに完成した13回放送の放送公開講座のテキストブック。

8月頃よりフルに多忙となる。

8月以降1988(昭63)年12月末まで。



録画の下打ち合わせ：右で拳を上げておられるのが大澤道義ディレクター、左の赤いシャツは加藤真理子さん、こちら向きは大学の担当官関本 守氏。

1988(昭63)年9月。



録画開始。第2回録画本番。
1988(昭63)年9月26日。



第14回上信越神経病理懇談会。
世話人石田陽一教授。
前橋に向かう早朝の新幹線。右端は古田晶子。
1988(昭63)年10月29日。



Rorke杯を懸けた対抗野球戦。
杯は石田先生の手。
1988(昭63)年10月30日。前橋。



放送公開講座最終回の第13回録画を終了した瞬間！
花東や大勢のBSN関係者が一勢にスタジオに。
1988(昭63)年12月12日(月)。



山田光則 歓送会と忘年会。ブリティッシュ・
コロンビア大学S.U.Kim教授へ。
1988(昭63)年12月22日。



新潟大学放送公開講座「脳の発生とその生涯」
主任講師生田房弘教授

が文部大臣奨励賞を受け全国放送となる。

新潟大学とBSN共催でのその祝賀会の三次会。

1989(平成)年3月9日。



河合謙介 送別の会、岡山大学へ。

1989(平成)年3月23日。



新しい Office のZimmerman先生を平野朝雄先生
と生田教授が表敬訪問。Dallasでの学会及び国際
神経病理学会理事会出席の前に。

1989(平成)年6月9日。



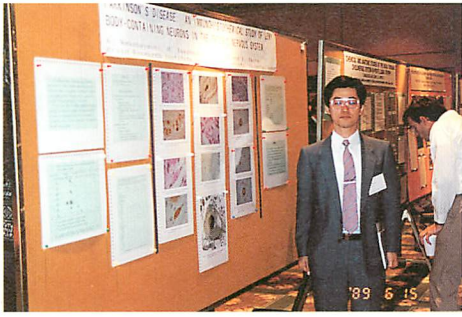
New Heaven 郊外のHarwintonにある
Zimmerman 先生のcountry home で。

1989(平成)年6月9日(金)~11(日)。



Montefiore病院に近いWoodlawn cemeteryにある
野口英世先生の御墓を Dallasでの学会に向かう前に参詣。

1989(平成)年6月12日(月)。



Dallasでの若林孝一とLewy小体。
1989(平元)年6月15日。



DallasにおけるZimmerman先生と
G.Kreutzbergおよび平野先生。
1989(平元)年6月16日。



平澤興先生御逝去の報をZimmerman先生らはダラスにて
1989年6月16日夜FAXで知る(日本の6月17日土曜日)。
この写真は1980(昭55)年6月16日生田教授宅で朝がゆの集いの折、
松井明子さん撮影。



北京の故宮を背に小柳清光、生田房弘、高橋均、王慕一。
文部省国際学術研究「中国における脱髄性脳疾患等の病理解剖学的共同研究」の第一回訪中の途上。天安門事件のあと。

1989(平元)年9月15日。

古田晶子、林世和教授 送別の会。

1989(平元)年12月14日。

古田：産業医科大学へ。



石田陽一先生の御尽力に感謝の杯。
第15回上信越神経病理懇談会
世話人生田房弘教授 新潟にて。

1989(平元)年11月18日。

石田陽一先生現役最後の会。



教室の面々。

1990(平2)年4月15日。

Pleomorphic xanthoastrocytoma, そして石田先生が次稿で述べられたような polar spongioblastoma についての問題が討議されたのち, Dr. Scheithauer が, いわゆる Dysembryoplastic neuroepithelial tumor (DNT) について述べ, Dr. Lantos, Dr. Nelson らが交々賛意を表明し, 新たな一項が加えられた。翌2日目は主として Neuronal tumor そして Meningioma が討議の対象となった。石田陽一先生はここで Desmoplastic infantile ganglioglioma の正当さを論じられ, 筆者は Olfactory neuroblastoma と neuroepithelioma について, 前述の如く述べた。第3日目は Craniopharyngioma, Pineal tumor, Cranial and spinal nerves などについて論じられた。また, PNET について Dr. Rork がその正当性を論じたが, Dr. Becker, ついで Dr. Burger そして Dr. Scheithauer らが次々に内在していると考えられる問題点を指摘した。

ともあれこの3日間の討論の末, 全参加者が合意に達し得たのは3月31日の17時30分過ぎで, 全員がその新しい分類にサインした。

そのようにして生まれた新分類は表2に掲げた通りである。

ここに石田陽一先生のご冥福を心から祈ります。

表1 脳腫瘍の組織分類に関する WHO Working Group, 第2回集会 (1990年3月28日~4月1日, チューリヒにて)

参加者名		
Dr. Laurence Becker	Toronto	Canada
Dr. Jean-Marie Brucher	Bruxelles	Belgium
Dr. Herbert Budka	Wien	Austria
Dr. Peter C. Burger	Durham	U. S. A.
Dr. D. K. Dastur	Bombay	India
Dr. Richard L. Davis	San Francisco	U. S. A.
Dr. William S. Fields	Houston	U. S. A.
Dr. Felice Giangaspero	Bologna	Italy
Dr. Jacques Hassoun	Marseille	France
Dr. Fusahiro Ikuta	Niigata	Japan
Dr. Yoichi Ishida	Maebashi	Japan
Dr. W. Jänisch	Berlin	Germany
Dr. Kurt Jellinger	Wien	Austria
Dr. John J. Kepes	Kansas	U. S. A.
Dr. Paul Kleihues	Zürich	Switzerland
Dr. Peter L. Lantos	London	U. K.
Dr. H. D. Mennel	Marburg	Germany
Dr. Sverre J. Mörk	Oslo	Norway
Dr. James S. Nelson	St. Louis	U. S. A.
Dr. Lucy B. Rorke	Philadelphia	U. S. A.
Dr. Bernd W. Scheithauer	Rochester	U. S. A.
Dr. Davide Schiffer	Torino	Italy
Dr. Ana Lia Taratuto	Buenos Aires	Argentina
Dr. Scott R. VandenBerg	Charlottesville	U. S. A.
Dr. Wolfgang Wechsler	Düsseldorf	Germany
Dr. Roy O. Weller	Southampton	U. K.



図1 脳腫瘍の組織分類に関する WHO Working Group, 第2回集会, チューリヒ, 1990年3月28日~4月1日。

後列: Wiestler-Hassoun-Giangaspero-Schiffer-Mennel-Lantos-Wechsler-Nelson-Becker-Dastur

中列: Ikuta-Burger-Ishida-Davis-Rorke-Jellinger-Jänisch-Weller-Budka

前列: Brucher-Mörk-Scheithauer-Kleihues-Fields-VandenBerg-Taratuto

表 2 Histological Classification of Tumours of the Central Nervous System¹⁾

1 Tumours of Neuroepithelial Tissue		1.7.7	Central neurocytoma	9506/0
1.1	Astrocytic tumours	1.7.8	Paranglioma of the filum terminale	8690/0
1.1.1	Astrocytoma	9400/3 ^a		
1.1.1.1	Variants: Fibrillary	9420/3	1.7.9	Olfactory neuroblastoma (Aesthesioneuroblastoma)
1.1.1.2	Protoplasmic	9410/3	1.7.9.1	Variant: Olfactory neuroepithelioma
1.1.1.3	Gemistocytic	9411/3		9523/3
1.1.2	Anaplastic (malignant) astrocytoma	9401/3	1.8	Pineal parenchymal tumours
1.1.3	Glioblastoma	9440/3	1.8.1	Pineocytoma
1.1.3.1	Variants: Giant cell glioblastoma	9441/3	1.8.2	Pineoblastoma
1.1.3.2	Gliosarcoma	9442/3	1.8.3	Mixed/transitional pineal tumours
1.1.4	Pilocytic astrocytoma	9421/3	1.9	Embryonal tumours
1.1.5	Pleomorphic xanthoastrocytoma	9424/3	1.9.1	Medulloepithelioma
1.1.6	Subependymal giant cell astrocytoma (Tuberous sclerosis)	9384/1	1.9.2	Neuroblastoma
1.2	Oligodendroglial tumours		1.9.2.1	Variant: Ganglioneuroblastoma
1.2.1	Oligodendroglioma	9450/3	1.9.3	Ependymoblastoma
1.2.2	Anaplastic (malignant) oligodendroglioma	9451/3	1.9.4	Primitive neuroectodermal tumours (PNETs)
1.3	Ependymal tumours		1.9.4.1	Medulloblastoma
1.3.1	Ependymoma	9391/3	1.9.4.1.1	Variants: Desmoplastic medulloblastoma
1.3.1.1	Variants: Cellular		1.9.4.1.2	Medullomyoblastoma
1.3.1.2	Papillary	9393/1	1.9.4.1.3	Melanotic medulloblastoma
1.3.1.3	Clear cell			
1.3.2	Anaplastic (malignant) ependymoma	9392/3	2 Tumours of Cranial and Spinal Nerves	
1.3.3	Myxopapillary ependymoma	9394/1	2.1	Schwannoma
1.3.4	Subependymoma	9383/1		(Neurilemmoma, Neurinoma)
1.4	Mixed gliomas		2.1.1	Variants: Cellular
1.4.1	Oligo-astrocytoma	9382/3	2.1.2	Plexiform
1.4.2	Anaplastic (malignant) oligo-astrocytoma		2.1.3	Melanotic
1.4.3	Others		2.2	Neurofibroma
1.5	Choroid plexus tumours		2.2.1	Circumscribed (solitary)
1.5.1	Choroid plexus papilloma	9390/0	2.2.2	Plexiform
1.5.2	Choroid plexus carcinoma	9390/3	2.3	Malignant peripheral nerve sheath tumour
1.6	Neuroepithelial tumours of uncertain origin			(MPNST) (Neurogenic sarcoma, Anaplastic neurofibroma, "Malignant schwannoma")
1.6.1	Astroblastoma	9430/3	2.3.1	Variants: Epithelioid
1.6.2	Polar spongioblastoma	9443/3	2.3.2	MPNST with divergent mesenchymal and/or epithelial differentiation
1.6.3	Gliomatosis cerebri	9381/3	2.3.3	Melanotic
1.7	Neuronal and mixed neuronal-glial tumours		3 Tumours of the Meninges	
1.7.1	Gangliocytoma	9490/0	3.1	Tumours of meningeothelial cells
1.7.2	Dysplastic gangliocytoma of cerebellum (Lhermitte-Duclos)	9490/0	3.1.1	Meningioma
1.7.3	Desmoplastic infantile ganglioglioma	9505/0	3.1.1.1	Variants: Meningothelial
1.7.4	Dysembryoplastic neuroepithelial tumour	9505/1	3.1.1.2	Fibrous (fibroblastic)
1.7.5	Ganglioglioma	9505/1	3.1.1.3	Transitional (mixed)
1.7.6	Anaplastic (malignant) ganglioglioma	9505/3	3.1.1.4	Psammomatous
			3.1.1.5	Angiomatous
			3.1.1.6	Microcystic
			3.1.1.7	Secretory
			3.1.1.8	Clear cell

学生講義・実習が例年のように桜と共にスタートする。
この年から徐々に授業を分散し始める。

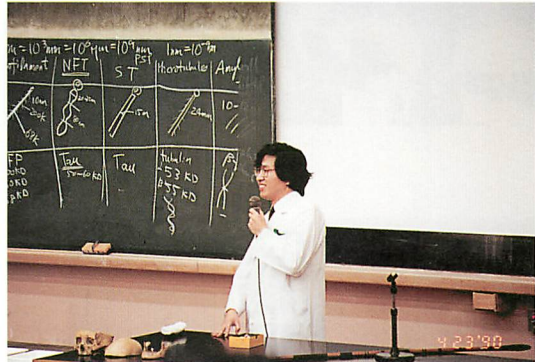
1990(平2)年4月。



生田



武田茂樹



高橋均



川崎浩一、林森太郎、
歓迎の会。

1990(平2)年4月26日。



Zimmerman先生の兄弟弟子
P.Cancilla教授、
カリフォルニア大学、の御来訪。

1990(平2)年5月22日。

新潟大学脳研究所創立記念パーティー。
1990(平2)年6月13日。



新人二人。



第20回新潟神経学夏期セミナーにて
アストロサイトで組。

1990(平2)年7月12日。

前列左から形態の佐々木宏先生、糖鎖シグナルの永井克孝先生、
NGFの古川昭栄先生、後列免疫の松本陽先生、司会と病巣修復
の生田房弘教授。1990(平2)年7月12日。

新潟国際シンポジウム
脳研究における神経病理学
Niigata International Symposium
Neuropathology in Brain Research

Sept. 9, 1990 10:30 am - 6:00 pm	YuJin Memorial Hall
1. Organella Specific Antibodies and their Application in the Study of the Golgi Apparatus in Amyotrophic Lateral Sclerosis	Dr. Nicholas K. Gonatas Philadelphia, U.S.A.
2. Murine Model of Cholesterol Storage Disease: A Neuropathological Study	Dr. Kinuko Suzuki Chapel Hill, U.S.A.
3. The Spongiform Encephalopathies	Dr. J. Trevor Hughes Oxford, U.K.
4. Neuropathology of Bantini Cystic Lesions in the Central Nervous System	Dr. Asao Hirano New York, U.S.A.
5. Pituitary Adenomas - An Immunoelectron Microscopic Study	Dr. Subimal Roy New Delhi, India
6. Rejuvenation in the Human Central Nervous System	Dr. Nitya R. Ghatak Richmond, U.S.A.
7. AIDS and the Central Nervous System: An Electron Microscope Study	Dr. Suzanne S. Mirra Decatur, U.S.A.
8. Microglia in Human Disease with Emphasis on Alzheimer's Disease and AIDS	Dr. Dennis W. Dickson New York, U.S.A.
9. Biochemical Studies of Proteins Associated with Alzheimer Neurofibrillary Tangles	Dr. Shu-Hui Yen New York, U.S.A.
10. Promise of Confocal Scanning Microscopy	Dr. Robert D. Terry San Diego, U.S.A.
11. From Brain Pathology to Neurophilosophy	Dr. Franz Seitelberger Wien, Austria
12. The Early Days of Neuropathology in the United States	Dr. Harry M. Zimmerman New York, U.S.A.
Sept. 10, 1990 2:30 pm - 4:00 pm	
13. The Neurocytology of the Brain	Dr. Jacques Hassoun Marseille, France
14. Brain Tumour Induction in Neural Transplants Using Oncogene-encoding Retroviral Vectors	Dr. Paul Kleihues Zurich, Switzerland
15. Immunohistochemistry in Brain Tumor Classification	Dr. Wolfgang Wechsler Disseldorf, F.R.G.

主催：新潟脳神経研究会
幹事：生田房弘
The Niigata Brain Research Association
Chairman: Fushiro Hata, M.D.

連絡先：〒951 新潟市北町1 新潟大学 脳研究所 新潟国際シンポジウム事務局

新潟国際シンポジウム
「脳研究における神経病理学」のポスター。
1990(平2)年9月9-10日。



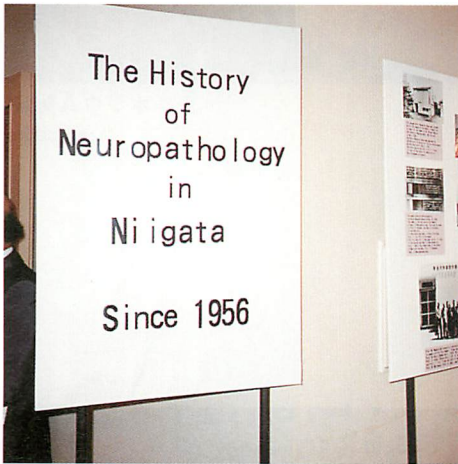
1990年7月頃の実験室。

9月の京都での国際神経病理学会を前に凍結病巣、
NGF、Hepatic Swelling、胎児脳発生等々で多忙。



シンポジウム一同がinformalに顔合わせ。生田教授宅にて。

1990(平2)年9月8日夕刻。



会場の廊下で新潟における神経病理学の歴史を要約展示。



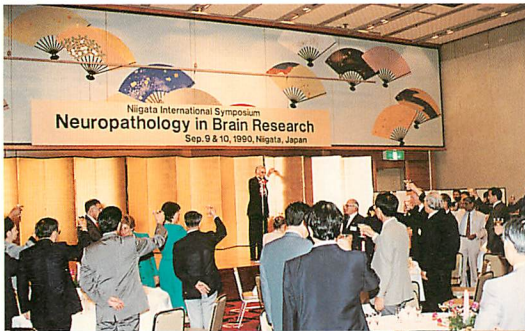


会場。有壬記念館2階。



シンポジウム記念の写真。

1990(平2)年9月9日。



シンポジウム記念とZimmerman先生の満88歳の祝賀会。オークラホテル新潟にて。

1990(平2)年9月9日。





シンポジウムが終了した9月10日の夕食は岩室の高島屋で。途中獅子ヶ鼻の夕日を楽しむ。獅子ヶ鼻岩上にて。午後6時。

有壬だより 1990・12・1 第6号

Niigata International Symposium
Neuropathology in Brain Research
Sep. 9 & 10, 1990, Niigata, Japan

有壬中念館

脳研究における神経病理学

本誌の発行は、脳神経科学の発展に貢献することを目的として、脳神経科学の分野で活躍する方々の研究成果や臨床経験を紹介し、脳神経科学の発展に貢献することを目的として、脳神経科学の分野で活躍する方々の研究成果や臨床経験を紹介します。

本誌の発行は、脳神経科学の発展に貢献することを目的として、脳神経科学の分野で活躍する方々の研究成果や臨床経験を紹介します。

国際シンポジウムについての有壬だより。1990(平2)年12月1日号。



Zimmerman先生御夫妻は平澤先生のふる里：味方村を訪問の後、新潟脳外科病院を表敬訪問。

1990(平2)年9月11日。

Zimmerman先生は中田、植木記念室にて院長新井弘之先生の歓待を受けられた後見学、会話そして色紙に揮毫。



大浜栄作 鳥取大学医学部脳神経病理学教授に決定。
その内祝いの会の二次会で乾杯。生田教授宅。

1990(平2)年9月26日午後9時40分。



文部省国際学術研究、中国の脱髄性脳疾患調査。
第2回訪中の時。重慶医科大学にて 典型的な
Balo剖検例を見る！
呂長虹先生（右から3人目）。

1990(平2)年10月7日。



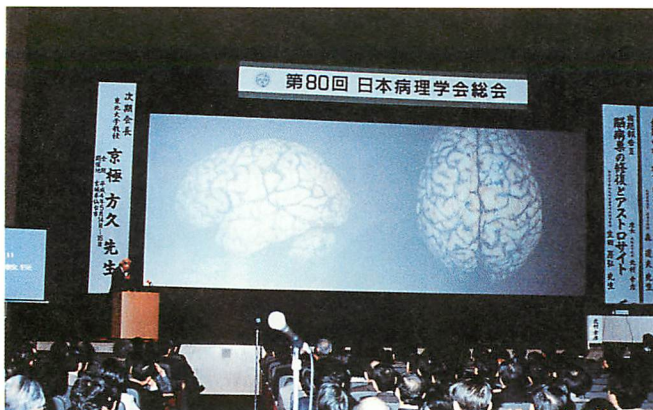
大浜栄作先生教授就任の記念に脳研究所前で。
検討会の後。

1990(平2)年11月8日。



大浜栄作先生 送別の会。かき正にて。

1990(平2)年11月22日。



第80回日本病理学会総会 大阪
生田教授宿題報告「脳病巣の修復とアストロサイト」。
1991(平3)年4月4日。



教室の面々。
1991(平3)年4月17日。



第32回日本神経病理学会 会長十束支朗教授。
山形にて。

1991(平3)年5月10日。



SSPE治療実験に阪大微研 上田重晴教授ら御来訪。
1991(平3)年5月23日。



左から柵橋靖子、村山佳代子、鶴見純子。

医学部大運動会の日。
1991(平3)年5月25日(土)。



大阪大学細胞工学センター
岡田善雄先生御退官記念の会で。
大阪。

1991(平3)年5月25日(土)。



教室のOB小林清市一家の来訪を受け、海岸を散歩。
1991(平3)年6月20日。



同じ時に安吾の碑の前で。



脳研創立記念パーティーに文部省大山 超科学官、
永井克孝先生をお迎えして。
水原の植木幸明先生の墓に詣でた、その帰り。
栗川脳研事務長、大倉庶務係長御案内。生田教授宅。

1991(平3)年6月27日(木)。



中国の留学生許 晶による教室での
餃子の講習会。

1991(平3)年7月12日。



中国の留学生王慕一先生の令嬢王曉禕(洋々)
を招待、来訪。事務室にて。

1991(平3)年7月22日。



新潟大学公開講座12回の担当が始まる。
医学部第一講堂にて。

1991(平3)年9月14日(土)。



武田茂樹送別の会。新潟脳外科病院病理部へ。かき正。

1991(平3)年9月14日(土)。



国際神経病理学会理事会並びに第6回ハンガリー・ポーランド
国際神経病理学会シンポジウム。ブタペスト。

1991(平3)年9月28日。..

右手前Y.Olsson,左手前からP.Kleihues,A.Guseo,Byron
A.Kakulas夫妻など。



右から一人おいてH.J.Adams,L.Leel-Ossy,
一人おいてJ.Cervos-Navarro,



檜前薫、棚橋靖子
送別の会。かき正
1992(平4)年3月26日。



教室の面々。
1992年(平4)年4月8日。



第33回日本神経病理学会総会 会長熊西敏郎教授
新潟の機会に。

左から生田房弘、Janisch、小川勝士、平野朝雄の各先生
1992(平4)年5月15日。



平野朝雄先生を柴又に御案内。
1992(平4)年5月17日(日)。

文部省国際学術研究：中国における脱髄性脳疾患の病理解剖学的研究。第4回訪中。

1992(平4)年7月2-8日。

北京総軍医医院にて7月6日。



1992 第22回 新潟神経学夏期セミナー (新潟大学脳研究所創立25周年記念)

期日：7月22日(水)～7月25日(土)

場所：新潟大学医学部第三講堂

対象：学部卒後の若い研究者・医師・学生等を対象とする*

主催：新潟大学脳研究所 新潟脳神経研究会
代表 生田 勇弘

	13:00	15:00	17:00	19:00
7月22日(水)	脳腫瘍と循環・代謝 武田 憲夫 (新潟大・脳・内科)	カルシウム・チャンネル 阿部 輝雄 (新潟大・脳・内科)	形の脳内表現 田中 善治 (長崎大・脳神経科)	
23日(木)	運動ニューロン疾患の新展開 オーバービュー 非定型的の臨床病理 萬年 甫 (新潟大・脳神経科)			Bunina小体 エピネチン化の变化 高橋 均 水澤 安洋 (新潟大・脳神経科)
24日(金)	分子生物学から神経学へのアプローチ ハンテントン病 遺伝子導入と 道佐子 七通 (新潟大・脳神経科)			突然変異からサイトカインを中心として 尾野 精一 小柳 清光 (新潟大・脳神経科)
25日(土)	神経疾患の分子メカニズム 辻 昌次 (新潟大・脳・内科)			NMDA受容体の分子的多様性 三品 昌美 (新潟大・脳・内科)

新潟大学脳研究所 創立25周年記念。

1992(平4)年7月25日(土)。

記念講演会は1992年の夏期セミナーの最終日に萬年 甫、三品昌美、辻昌次の三先生によって、有任記念会館で挙行。

引き続き創立記念式典には長谷川善一文部省国際学術局長、森 亘 日本医学会会長、岡田善雄先生等々の御来賓をお迎えし、祝賀会の乾杯は柴田昭医学部長の御発声で行われた。

1992(平4)年7月25日(土)。

	13:00	13:50	14:40	15:40
部門別プログラム	神経生理 9日 神経病理 9日 実験神経病理 9日 神経化学 10日 神経薬理 10日 脳神経外科 10日	神経生理 10日 神経病理 10日 実験神経病理 10日 神経化学 11日 神経薬理 11日 脳神経外科 11日	神経生理 11日 神経病理 11日 実験神経病理 11日 神経化学 12日 神経薬理 12日 脳神経外科 12日	神経生理 12日 神経病理 12日 実験神経病理 12日 神経化学 13日 神経薬理 13日 脳神経外科 13日

受講申込方法
受講料 (医師・研究員12,000円 院生・学生6,000)
○1日の受講希望者は日を指定し、上記の単課をそれぞれお申し込み
○部門見学の希望者は希望部門名と見学日をお知らせ下さい
申込先 〒951 新潟市旭町 新潟大学脳研究所 神経学夏期セミナー事務局





D.Calton Gajdusek,NIHが今年もViliusk脳炎の研究にYakutsk への途上新潟を訪れた。往路

1992 (平4) 年8月25日。



中国の留学生 蘇 牧 歓迎の会。

1992 (平4) 年10月21日。



Toronto での理事会・学会の後、生田教授はHarwintonのZimmerman先生の country home に招待された。9月20-22日。この2泊の滞在が最後の滞在となってしまった。

1992 (平4) 年9月。



第18回上信越神経病理懇談会 新潟。

1992 (平4) 年11月21日。

生田教授が新潟日報文化賞を受賞、

1992(平4)年11月3日。

その祝賀の会。かき正。1992(平4)年12月5日。



新潟国際シンポジウム、「中国の脱髄性脳疾患、特にBaló病(同心円硬化症)について。」文部省国際学術研究「中国における脱髄性脳疾患等の病理解剖学的共同研究班(代表・生田房弘)」が主催。新潟大学有任記念館。

1992 (平4) 年11月27日。

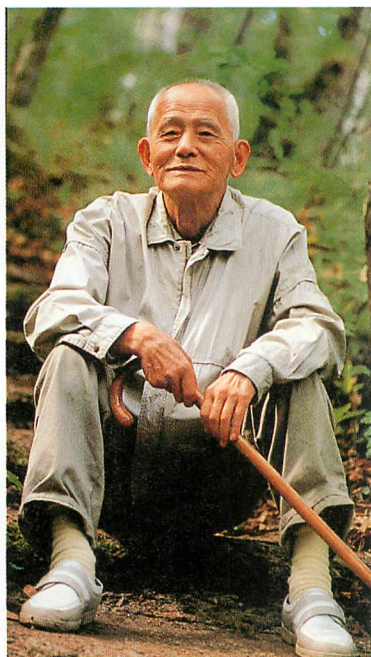


長谷川富淑。

1993(平5)年 春の組織標本作製室。
この二人の体制に完全に移行した。



丹田智恵子。



笹 智衆逝く。

1993(平5)年3月16日。



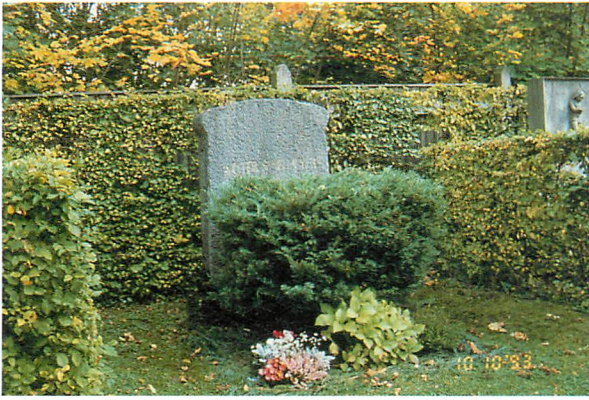
岡崎春雄先生Mayo clinicの御来訪。

1993(平5)年7月1日。



生田教授がCajalの生い立ちの地を求めて、
ピレネーへの旅に出る。
Cajalのお孫さんであるサラゴサ大学のCajal教授から
Cajalが学生時代に 画いた水彩画の説明を受ける。

1993(平5)年9月30日。



生田教授はGeorge Kreutzberg教授にMünchenに招待され、1929年春 Zimmerman、平澤両先生の師であった Walther Spielmeyer先生の墓に案内される。

1993(平5)年10月10日。



この翌日、Kreutzberg教授の小学生時代の疎開地であったMarktbreitのAlzheimer先生の生家にも案内されている。

1993(平5)年10月11日。



クバプロの仕事開始を皆で決意した日。かき正にて。

1993(平5)年10月29日。



若林孝一の Terry先生への留学歓送会の3次会。

1993(平5)年11月18日(木)。



伊藤拓緯 送別の会。新潟大 整形外科教室へ戻る。

1994(平6)年1月13日。



生田教授の学生系統講義の最終日の早朝。
1994(平6)年4月20日。



その日の講堂。



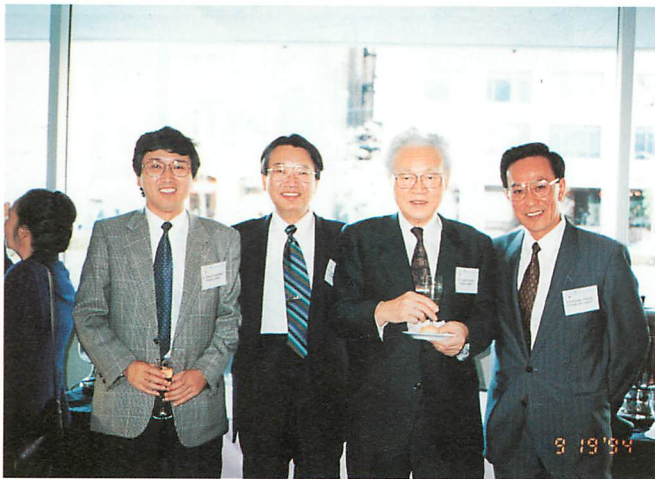
その日の実習室。



その日の教室の面々。 1994(平6)年4月20日。



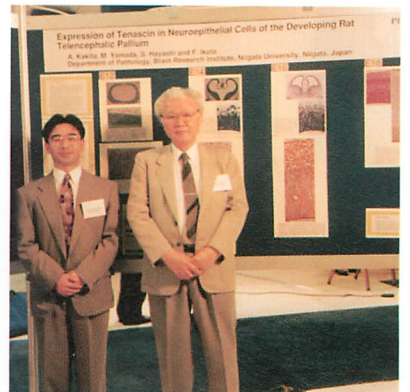
海開き・家族同伴。
1994(平6)年7月28日。



第12回
国際神経病理学会Toronto。
1994(平6)年9月18-23日。
Welcome Receptionにて。
1994(平6)9月18日。



日・米・中国の脱髄性脳疾患の比較。



柿田らの脳の発生。



Torontoの学会にて
平野朝雄、
G.Kreutzberg教授、
R.Terry、生田房弘の
各教授。
Banquetにて。
1994(平6)年9月21日。

Zimmerman先生93歳の誕生日。
平野先生、Montefiore病院 麻酔科
長島教授、Poon教授ら、New York
の寿司屋六本木にて。28日であるが、
1日早く。
今思えば、この時すでに先生のrectal
cancerは、始まっていたのに違いない。

1994(平6)年9月27日。



文部省国際学術研究；「東西の接
点、東欧における脱髄性脳疾患の
病理組織学的研究。」第1回派遣。
プラハKarlův橋にて。後方はプラ
ハ城。

1994(平6)年10月13日。



医学部6年生への病理標本示説の生田教授最終回「人間の死の時刻」の講義を終った時…
思いがけず…………。

1994(平6)年10月24日。



第20回上信越神経病理懇談会 世話人中里洋一教授 前橋。
石田教授と相談し、この会をスタートさせてから丁度20回目。
生田教授にとって現役最後の会となった。

1994(平6)年11月4日。



津和野町に中田瑞穂先生の生誕のポイントが、遂に判明した。
新潟の有志によってそこに「日本脳外科の父 中田瑞穂先生
生誕の地」の碑が建立された。この周囲の「びんか」は
Zimmerman先生のcountry homeに由来し、先生の誕生日
4月24日頃ちょうど可憐な紫色の花をつける。

1994(平6)年11月19日。



この年の忘年会。

1994(平6)年12月22日。



毎朝9時から始まった朝のコーヒータイム。
1994(平6)年12月29日。



生田教授らの最終講義。

1995(平7)年2月18日(土)。

同時に藤田恒夫、佐武明尚教授も退官された。



生田教授の「40年の道—三つ児の魂」。



日本学術会議 第30回 脳の日シンポジウム。
1995(平7)年3月9-10日 世話人 生田教授により新潟で開催される。





生田教授退官記念の会の為に訪れられたTerry教授、Kreutzberg教授御夫妻、平野先生父子、新井弘之先生そして教室の面々の顔合わせ。生田教授宅にて。

1995(平7)年3月22日。





遠来のRobert Terry、George Kreuzberg御夫妻、平野朝雄先生父子が、加島屋（社長加島長作氏、前列右から2人目）工場を見学し歓待される。

1995（平7）年3月23日。



生田教授退官記念講演会。イタリア軒にて。

1995（平7）年3月25日。



生田教授退官記念祝賀会。イタリア軒にて。
1995(平7)年3月25日。



17週胎児脳。前後4.4 cm。
あらゆる脳疾患の修復メカニズムの
基本は既に胎児脳が知っている。
胎児脳は疾患病理学の原点として学
ぶべきものではあるまいか？

あ と が き

当初、生田先生は業績集の作製を固辞されたのですが、それではと皆で考えた結果、単に論文や業績のみを集めたものでなく、教室や生田先生ご自身が歩んでこられた神経病理学の道のり、さらにはその中での多くの人たちとの出会いがわかるものにしようとしてスタートしました。その後、作業を進めてゆくうちに、新潟での神経病理学の道のり、それは生田先生の歩みそのものでもあるのですが、それを写真でも表現できたら時代や世相が一目でわかるのでは、との意見も出され、この写真集が誕生することになりました。しかし、実際に作業を始めてみると、それがいかに困難なことであるかが判明しました。本書に掲載された写真のほとんどは生田先生が大切に保管されてきたものであり、先生の御尽力なしには完成できなかったと思います。

本書もこのたびようやく出版の運びとなり、できあがってみると、新潟での神経病理学の歩みの中にどれほど多くの先輩方の御努力があり、またお互いが固い絆で結ばれていたかが一枚一枚の写真の中からひしひしと伝わってくる感じがします。

ここに本書を、退官記念事業に御賛同くださった方々に謹んで進呈いたします。有り難うございました。

生田房弘教授退官記念事業会

新潟での神経病理学

写真に見る歩み

生田房弘教授退官記念

平成9年3月 発行

生田房弘教授退官記念事業会
新潟大学脳研究所内

印刷株式会社第一印刷所